

---

# チョメリブ2

タンポポ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チヨメリプ2

### 【Nコード】

N2105C

### 【作者名】

タンポポ

### 【あらすじ】

タンポポが代表する二大小説『チヨメディー』と『リプレイ』を混ぜちゃった新感覚コメディー！悪魔になった明が赤い目を持つ譲の目を奪いにいく物語り。あ、もちろん前作を読んでも大丈夫です。

## リプレイ〜プロローグ

「ハッ、相変わらず弱えな讓」

『るせえ…お前だって…足元フラフラじゃねえか』

「お互い最後の一撃だな」

『ああ、うおおらあ！』

「ハアハア…やっぱ強いな」

『へへ…さっき弱いつて言っただじゃねえか…ハアハア』

「そうすりゃもっと燃えるかなあって思ってたよ？」

『確かに…なあ、ずっと…俺らこうして殴り合ってたえな』

「……ああ、約束…な」

『…フッ、次は決着つけるぜ』

――――。

「昨日をもって、君は転校されました」

『待てよ先生！俺に何も言わないでか？』

「貴様には何も言っていないかった。早く席に座りなさい！」

…ふざけんな…

『ふざけんなあ！！！！』

…ハッ、夢…か。

俺の目が赤くなる原因となった親友との突然の別れ。

あの頃の俺達は小学三年生だと言うのに、日々喧嘩に明け暮れ、先生や親の言う事も聞かない、今思えば本当に糞餓鬼だった。

何で今更あの頃の夢なんて見たんだろう…。

もう俺の目は赤くならないのに。

もう直ったんだ。これからは普通の高校三年生。

今までの分も青春を感じなければ…！

朝、俺は悪夢のせいでいつもより早く目が覚めた。

もうあれから一年経った。

俺は怒りを感じると目が赤くなってしまおうという意味の分からない  
体質のせいで、人との関わりを避けてきた。

そんな時にエン・リユーファという女の子…しかも天使と名乗る子  
が来た。

リユーファが俺に与えてくれたものは、生まれ変わる事。

しかし、俺はその権利を否定。

人として生きる事を選ぶ。

同じく目が赤くなる大樹<sup>だいぎ</sup>と友達になり、さらには、リユーファまで  
もが目が赤くなるという、何とも変わった奴ら同士が集まった。

目が赤くなるとは、充血しているとかではなく、黒い瞳の部分が赤  
くなるのだ。

その理由として、俺は怒り、リユーファは悲しみ、大樹は恐怖感…  
と、人間の弱い感情が溢れると…と言うのが原因だった。

つまり、全く逆の感情を得る事で俺達は元通りになったのだ。

一度目が赤くなってから、友情などには無縁だったために、気付く  
のも遅れたというわけだ。

あれから一年、俺は怒っても目は赤くなる事はなかった。

だから友達にも言いたい事が言え、平和な日々を暮らしている。

しかし…朝、顔を洗いに洗面所の鏡を見て、俺は絶句した。

…嘘だろ…？

また瞳が赤くなってやがる…。

## チヨメディー〜プロローグ

「こら、起きろ」

――我が眠りを妨げる者よ、覚悟はいいな？

「うるせえよ！もう朝だぞ！？」

――我が眠りを妨げる…

「アラーム！」

くドカーンく

『うわぁ！メルト！てめえ呪文で起こすのは辞めろつつたべ？』

「じゃあ早く起きろ」

…あ、どうも。チヨ・メディー改め、人間界での名前は明です。

以前は人間、チヨメディーの主人公をやってました。

今、俺は魔界にいる。

人間として育った僕が実はサターンでした…ってオチ！！  
もう参っちゃう

でもまあ魔界の暮らしも悪くないもんだよ。

寮に入れられて学校に通うんだけどね、今まで人間だったから魔界の学校が楽しいの。

呪文だぜ呪文！？

ちなみに今、同居人のメルトって奴が唱えた　アラーム　ってのも呪文の一つ。

目標物一体の頭上に小さな爆発を起こすものだ。

ドラクエで例えるならイオみたいなの？

「……鏡、見る？」

そう言っでメルトが手鏡を渡してきた。

フツ、鏡に映った俺の甘いフェイスは5才〜65後半の乙女心を忘れない女性に大ウケでちなみに俺のストライクゾーンは外角低めです！

『フツ、今日もツイストが決まっ……またかああー！！』

アラームのせいで俺の髪の毛チリッチリ！

好きな料理はエビッチリ！

好きな教科は地理っ地…

「はい、アイロン」

ありがとメルちゃん。

若干滑ってた所を助けてもらって。



そうそう、この服のシワを伸ばすアイロンで……今日もお勤め頑張  
ってね、あ・な・た……って何よこの口紅の後！ キーー悔しい  
！ 浮気したのね！

「お前のボケに付き合ってらんねえ……リバス！」

自分から振ったくせに……。

またメルトが呪文を唱えると、地理っ地理だった俺の髪の毛が見る  
元のストレートに。

リバスとは元の形（姿）に戻す呪文だ。

以前、閻魔様の銅像をブチ壊した時にメルトが助けてくれた事もあ  
ったな。

それも、システム上としては、同居人がパートナー！。

俺とメルトは何をするにも一緒に、さらに失敗も連帯責任。

俺の寝坊はメルトの失敗にも繋がるので、毎日メルトは必死で俺を  
起こす。

その度に俺は危険な思いをしているわけだ。

こっちに来てから俺も何個か簡単な呪文は覚えた。

しかし、呪文とは私欲の為に使うのは禁じられている。

さらに、呪文はメンタル力を使うので仕事の時以外は好んで使わな

いのだ。

「ほら、今日も仕事だ。また人間界に行くぞ」

メルトが支度を終え、俺に出発の合図を出す。

もう人間界に行けないと思っていたが、実は仕事で何回も行っている。

しかし、これも決まりでターゲット以外の人間との関わりも禁じられているため、昔の友達と合う事はなかった。

「今日の仕事内容はターゲットの血液500ミリの調達だ」

メルトが今日の内容を口にする。

俺達サターンの食料は人間の生き血だ。

メルトは冷静沈着で優秀。さらに卑劣も持ち合わせるエリート。

どんな過酷な仕事も顔色一つ変えないでこなしていく。

「準備できたな、いざ人間界へ…」

メルトの呪文と共に俺の意識も薄れていく。

俺達は人間界の上空に浮いている。

「奴がターゲットだ。行くぞ…」

メルトが蒼い瞳を鋭く尖らせ、艶やかな長髪を風に靡かせて言った。

『OK、美少年』

俺は右手を高く上げ、精神を集中させた。

『コルト!』

指先から黒い光が出ると、それがターゲットに命中。

コルトとは、目標物の運気を一時的に大幅に欠落させる呪文だ。

「ぐはあああ!!」

ほら、ターゲットも口から血い履いてその場に倒れ……あれ?

「馬鹿野郎! また失敗かよ! 間接的に血を取らないと駄目だろうが」

あれえ? 本当はターゲットを転ばせて、転んだ先にガラスの破片が落ちててそれで出血を誘ったんだが…  
どうやら失敗みたい

—————。

「また貴様らか…」

「申し訳ありません、閻魔様…」

『わりい、またミスっちゃった』

「メディー！頭が高いよ！つてか言葉使いに気をつける」

メルトは閻魔の前で片膝を地面に着け、頭を下げている。

「まあよい…メディー、貴様はサターンの血を受け継いでいるためその呪文は強力過ぎるのだ…そのせいで、まだ未熟な貴様にコントロールは難しいのは分かる…ただこう何回も失敗が続くとのう…」

俺の父は名高いサターンらしい。その血を受け継いだまでは良いのだが、18歳まで人間として育った俺は、幼い頃からの修業もしていない。

よって、体と心がついていけないのだ。

閻魔様はため息をはくと、契約書にはんこを押した。

「閻魔様？次の指令は？」

メルトがそれに気付き、恐る恐る聞いた。

「危険度、難易度、共に最高ランクの仕事じゃ」

閻魔様はいやらしい笑みを見せると契約書突き出した。

「…赤い目の…剥奪？」

メルトの顔色は強張ったままだ。

「最近人間界にまた赤い目を持つ者が現れた。その目を奪ってこい」

「私とメディーはまだ修練中ですよ？こんな仕事のレベルまで達していない！」

「心配するな。メルトは同期の中でトップの成績。メディーは強力な魔力が潜在している。これも一つの試練じゃ」

「…そんな」

普段は常に冷静で、滅多な事にしか表情を変えないメルトからは、汗さえも流れていた。

「もし任務が成功すれば二人の階級を上げよう」

魔界にはそれぞれ階級がある。

デビルにA、B、Cと三段階。

殆どの奴はここにいる。

ちなみにAが一番良い。

さらに階級が上がるとデーモンの称号がもらえる。

デーモンになれるのは、ほんの一握りの悪魔だけであり、デビルの憧れだ。

メルトはデビルAのトップ。最もデーモンに近い存在と言われているが、まだ早い…といつも言っている。

これは魔力や、判断力、仕事の成績によって分けられる。年齢は全く関係ない。

閻魔様の歳が俺より下なのがいい証拠だ。

まだ十歳くらいの毛も生えそろうてないようなガキが語尾に　じゃとか自分の事　ワシ　とか言うなよ。

ちなみに俺の階級はデーモンの上をいくサターン　仮　だ。

なぜかと言うと、判断力や成績は赤点でも、それを補える程、魔力がありえないくらいあるらしい。

だが、さすがに危険とのことで、今はまだデビルの奴と同じ扱いだ。それで、デビルトップのメルトとパートナーを組んだ訳だ。

俺がサターンと知っているのは閻魔様とメルトだけだがな。

「ターゲットは日本。名は木下　譲。天使が気付く前に狩ってこい！」

「はい!!」

## リプレイ第一話　俺が…能力者？

なんでまた目が赤く…？

ちよ…落ち着くんだ。今日…いや、俺は今怒ってなんかいない。

朝の夢があったとは言え、特別な感情は出していない…。

…どうする、どうする俺！

「…譲君！」

ふいに後ろから声をかけられてビクついた心臓。

……この展開はあの時といっしょだな。

ここは俺の家なのに勝手に入ってこれるって言うたら…

「大変よ譲君…って、何よ、その…またお前か…みたいな顔は？」

やっぱりリニューファ…いや、愛だったかな？

『いや、展開の流れが的中したからさ』

「もう…あら？ずいぶんとさっぱりした髪形にしたわね」

まあ、一年前は目を隠すために髪伸ばしてた訳だし。

『ってそうだ！愛、なんか…俺の目、また赤くなっちゃったんだけ

ど？  
』

「ええ、事態が良くないわよ」

驚かない愛を見ると、どうやら俺の朝の様子は筒抜けらしいな。

「あなたは選ばれし者なのだあ！」

バーン…という効果音が聞こえそうな程、人指し指を俺に向ける愛。  
…うわあ。

「ちょ…なんかツツコミ入れてよ！」

だつて…ねえ？

そもそも愛、キャラ変わったの？

「天然美少女な設定よ」

設定とか言つなよ。

つか俺つてもっと暗い性格だった気が…。

「そんな事より、悪魔が譲君の目を狩りに来るわよ」

ほお、そりや大変だ。まあ、赤い目はもともと殺さなきゃいけない存在だしな……………は？

『はあ！？』

「反応遅いよ」



ちょっと待て、どういう意味だ？

愛がいるくらいだ。俺は天使や神の存在を信じるようになった。

つまりは悪魔だって実在するのだろう。

その悪魔が、俺を狙いに？

「なぜ赤い目を持つ者は殺されてきたのか…それを説明してあげる」

愛の話によると、赤い目には何かしらの能力があるらしい。

それは、いずれも人間離れした能力。

それを悪魔が欲しがるらしい。

それを恐れた天界は、今まで殺してきたとか…。

「私も狙われているの。だから天界を追いつちやっただけ…」

愛も赤い目を持つ一人。

天界に悪魔が攻めて来られては堪らないとの事で人間界に来たらしい。

…ん？ って事は…

「これから一緒に住むから ヨロシクねえ」

ええ… やっぱこの展開きましたか…。

「もつと喜びなさいよ、こんな可愛い子と一つ屋根の下で暮らせるんだから」

まあ確かに愛は可愛い。

大きな瞳に腰まで伸びた艶やかでストレートな金髪。

小柄な体格で幼い顔立ちで羽がついてりゃ、そっち系の人に受けそうなもんだ。

「ちなみに私の能力は慈悲能力。怪我や傷口を塞ぐ事ができるの。譲君のはまだ謎。…それから、あの人の所にも行かなきゃ…」

愛が言ったあの人とはただ一人…三人目の赤い目を持つ人間、沢田大樹だろう。

## チヨメディー第一話　僕の仕事？赤い目を狩るの！

『なあメルト、なんで閻魔様は赤い目を欲しがるんだ？』

「赤い目には能力があるらしい。譲って人間の能力は　破壊能力だ。それでだろう」

『狩るって…言うって…やつぱり…』

「ああ、スパツとな」

きゃー野蛮！

聞きました奥さん、目をスパツですって！  
グロいグロい、俺には無理ですそんなの。

「この仕事失敗したら閻魔パーク行きだよ」

『マジで！？閻魔パークって言ったら、あの噂の美女に囲まれてウハハンな所か！？』

「いや、全く逆の生き地獄」

…やべ、怖えや。今回は真面目にやる。

『でもさ、閻魔様が欲しがる程の破壊能力だろ？俺達じゃ危ないんじゃないの？』

「かなり危険だ。だから難易度MAXって言っただろ？」

…どっちにしる危険か。

元人間の俺が人間の目を狩りに行くのかあゝ。

なんか可哀相だし乗り気じゃないなあ…。

「メディー！見つけたぞ！あいつが譲だ」

上空から目をこらして見ると、さっぱりした短髪のさわやかボーイがいた。

…女連れ？可愛いじゃねえかちくしょう。

「ちつ、もう天使に先回りされていたか」

天使？ あの女の子が天使なの。

『あれ？リユーファじゃん』

譲の隣にいるのはエン・リユーファだった。

「知ってるのか？」

『前作の最終話でちょっとな』

「良く分からんが、あの天使は譲のガードみてえなもんだ。おそろく付きつきりだろう」

付きつきり…？

住み込み…？  
夜の営み…？

許さん！！！！

『メルト！本気で行くぞ！』

「お…おう。今回はやる気だな」

『ああ！男性読者のためだ！』

「……………？？」

『作戦は！？』

「破壊能力…一体どんなものなのかがまだ分からない。ここは慎重に様子見だな…」

『分かった！とにかく突っ込むんだな！とりゃああー！！！』

「…判断力赤点野郎が…」

俺は勢い良く譲に突っ込んだ。

「譲君、悪魔よ！」

リユーファが俺に気付く。

「明…？」

ああ、俺…久しぶりに人間の名前呼ばれたよ。

「一年ぶりね」

『ああ、だが今回は敵同士のようだな』

「…そうね」

こつたも仕事だ。なりふり構ってられない。

相手は女だろうが本気で行くぜ。

くらえ…俺の最大の呪文。

『デイーメー!』

右手に黒い光が集まり、それが大きくなっていく。

集中…それさえできていれば俺だって操れるんだい!

どんな呪文か、どちらを狙っているのかが分からない二人は身構えている。

俺の狙いはもちろん譲だ。極力、女の子は傷付けたくない。

よし、出力最大パワーが貯まった。くらえ人間!!

「愛ちゃん!譲君と距離をとって!悪魔の狙いは譲君だ!」

黒い光の発射と同時に新しい人間が現れた。  
俺の思考が読まれた…？

「讓君、一度右に回避した後、すぐ後ろに飛んで！」

なんてこった！

呪文の効力まで読まれている。

デイメという呪文は単体の光線だが、一度地面に接するとターゲットの方にもう一度伸びる攻撃だった。

その第二の矢も後ろに飛ばれ避けられてしまった。

『ちつ…もう一度だ…』

「辞めるメディー！そんなの当たったらターゲットは木っ端みじんに吹き飛ぶぞ？」

そうだった。目的はターゲットの赤い目の剥奪。  
跡形もなく消してしまっただけは無意味だ。

「それに見ろ。お前の呪文を読み切った人間の目も赤いぞ？あいつも能力者だ」

『能力者二人に天使か。人数的にも分が悪いな』

「ああ、ここは一時退却だ」

悔しいがそうするしかないな。

『勝負はおあずけだ！それでは、さよならナ…』  
「それはパクリだから怒られるぞ」



## リプレイ第二話　何もできない主人公

「讓君、悪魔が近くにいますわ」

『なに！もう来たのか？』

「ええ、奴らの視力は32はあるわ。おそらく上空からこちらの様子を見てるわね」

視力32って…。

「…来たわ！」

空に浮く二人の悪魔。

その一人が勢い良く飛んでくる。

「デーマー！」

何かの呪文だろうか？　右手に黒い光が集まり大きくなっていく。

あんなの、くらったら死ぬぞ！？

「讓君！」

あれは…大樹！？

どうやら向こうから来てくれたようだ。

大樹の目もまた赤くなっている。

「讓君、一度右に回避した後すぐ後ろに飛んで！」

『お…おっ！』

黒い光の物体が俺を目掛けて飛んでくる。

大樹の言う通り、まずは右に回避。

その後すぐ後ろに飛んだ。

勢い良く飛んだので尻餅をついてしまった。

目の前には、俺がいた二つの場所が、アスファルトなのに…えぐれていた。

あ…危ねえ…。

攻撃を外し人数的（俺は何もできないが）にも分が悪いと判断したのだろうか、悪魔は撤退していった。

『大樹、助かったよ』

「危なかったね。…ぐっ」

『どうした！？大丈夫か！？』

「大丈夫…ちょっとフラツときただけだから」

どうやら能力を使うとその代償があるらしい。

大樹の場合、思考看破能力。

つまり、相手の思考を読み取れる能力らしい。

しかし、それは相手の脳から直に読み取るため、情報量の多さに脳が付いて行けず、破裂しそうな程の痛みが伴うらしい。

「讓君、さつき尻餅ついた時に足りくじいたでしょ？」

なんか足がズキズキすると思ったら血が出ていた。  
足首は軽い捻挫をしたみたいだな、こりや。

「…まかせて」

愛の手からポツと温かい光が足に当てられると、傷がみるみる治っていく。

ひねった足首も、曲げててもなんともない。…スゲーな。

「それが愛ちゃん的能力…」

「これが慈悲の能力よ。たいした怪我じゃなければ代償もないわ」

愛の代償は自分の精神力。まあMPみたいなもんらしい。

「それで、讓君の能力は？」

「それが問題ね。次に悪魔がくるまでに何とか見つけないと…」

「え！？分からないの？」

…なんか足引つ張ってるみたいでゴメンなさい。

でも、確かにそうだ。状況は良くない。

俺の能力は何なんだ？

「僕の場合は、勝手に人の思考が読み取れたのが始まりだったんだ。譲君も何か変わった事ない？」

変わった事…ないな。

なにしろ、ついさつき気付いたんだ。

「ってかさ！何でまた急に目が赤くなったの？」

大樹の言う通りだ。トラウマが原因で赤くなった目。

治すには逆の感情を持つ事だったし、それで治ったはずだった。

「それが問題点二つ目。あれは私達の勘違いで、一年前に赤くなつたのは、能力覚醒の前兆だったの」

うわ、って事は俺ら恥ずかしくね？ 前作で普通の高校生だぁ〜とかほざいちゃったの？

「とにかく！次に悪魔が来た時、能力が分からない事を気付かれなようにしてね！」

もしバレれば、それが命取りになるってか…。

しかし、今のうちに何かしらの対策を練らないと…

次こそ…殺される。

## チヨメディー第二話　能力の欠点発見！

赤い目：結構やつかいだな。完璧に俺の思考が読まれるとは…。

リユーファの能力は慈悲だから、俺達が攻撃される事はないが、せっかく与えたダメージを回復されては堪ったもんじゃない。

こっちも呪文を使える回数は限られているんだ。

それに加えて、譲の破壊能力。

……一体どうすれば…。

「なあ、メディー。一つ気付いたんだが…」

『なんだよメルト。戦闘に参加しなかったくせに』

「観察してたんだよ。それで気付いたんだが、おそらく譲は自分の能力に気付いていない」

…確かに、その可能性はあるかも。

俺とメルトが話していた時が、向こうの攻撃の最大のチャンスだったはずだ。

こっちが殺そうとしているのに抵抗の能力も使わなかった。

いや…使えなかった。

使い方を…知らないから？

何にせよ、メルトがそう言うんだ。あながち嘘でもないだろうな。

「譲が能力に気付いていない今がチャンスか…」

『だが、思考看破能力を持つ人間はどうする？こっちの攻撃は全て奴に筒抜けだぞ？』

「なあゝに、そんなのすでに手は討ってあるさ」

さすがデビル成績トップだ。頼りになるぜ。

『じゃあ早速…！』

「ああ、リベンジ…いや今回は本当の戦いだ」

一時間も間が経ってないまま、再び能力者の元へ。

「嘘…もう来たの？譲君、気付かれないように…分かってるわね？」

リユーファの表情が堅い所を見ると、討つ手なし。

やはり譲は能力に気付いていない！

『メルト、作戦は？』

「フフ、…ヒソヒソ」

『分かった！ヒソヒソだな…！』

「いや、小声の効果音を口にしたただけなんだが…」

『メルトのキャラでボケは無理！ってか、あんたコメディーに場違い！』

つと、もめてる場合じゃないか。

メルトの作戦通り動くけど、思考は読み取られるんじゃないのか？

まあいい、ここはメルトを信じるしかないか…。

「作戦開始！」

『おう！』

俺達は二手に別れ、まずは思考看破能力を持つ大樹狙いにした。

今の所、譲はただの人間だ。攻撃される心配はない。

「大樹君、能力発動して！」

「……………くっ」

「どうしたのよ？早く！」

「……………読めない」

ハハハ！ 聞いたかメルト。俺達の思考が読めないだとよ！  
作戦は成功みただぜ！

「いいかメディー。思考に漢字を使え。大樹は学校に行つてなかったみたいだから、かなり頭が悪い」

ハハハ！ まさかこんなバカな展開になるとはなあ。



…いいのか、こんなオチで。

読めない って…思考じゃなくて漢字が読めないって事？

なんでチヨメデイーだと戦闘シーンもこんな緊張感ないんだろ…。

「メデイー！お前は右から回り込め。挟み打ちで近距離まで詰めてから威力を抑えた呪文で攻撃だ！」

「メデイー！お…は…から…り…め？」

平仮名だけ読まれたー！

もう良いや。勝負は早めに着けるか。

俺は右から、メルトは左から回り込み、距離を縮めていく。

大樹の弱点さえ分かれば、狙いは譲だ！メルトも同じ考えだろう。

俺達空を飛べる悪魔のスピードに人間が付いて来れる訳もなく、距離はもう一メートルもない。

俺とメルトは譲に手を向ける。

…これで終わりだ！！

### リプレイ第三話　戦闘シーン一段落

まだ一時間も経っていないうちに、再び悪魔が現れた。

こっちは何の対策も練ってねえってのに、ちつとは空気読め！

「フツ、讓君。空気は吸うものだよ」

うぜえこいつ！

『俺の思考読まないで悪魔の思考読め！』

「そうよ！早く！」

気が付けば、悪魔が既に行動に移っていた。

「……読めない。僕、学校行ってなかったから、漢字読めないよお！」

馬鹿かこの展開はあ！

え？　終わり？　俺達死ぬのか？

――ヒュン。

耳元を風が吹いた、その刹那。わずか一瞬にして間合いを詰められ

た。

二人の悪魔に挟まれて手を向けられている。

やばいやばいやばい…俺、絶対死ぬよこれ。

ふうー、どうせ死ぬなら、最後に悪あがきでもしてみるか。

『待て！』

と言ってそれぞれに手を向けると二人は手を降ろした。

…………… ホントに待ってくれたよこの悪魔達！

こりや案外、ハツタリが通用するかも。

『…使うぞ？俺の能力』

「貴様が能力に気付いていない事は知っている。無駄なあがきは辞めておけ」

もうこのメルトって人ヤダア！ 絶対コメディーに場違いだよ。

「じゃあ、目を頂くか…カマルト」

メディーって悪魔が呪文を唱えると死神が持つてそうな大きな鎌が出て来た。

それを大きく振りかぶりーの、Bボタン連打でパワーを貯めーの、はい勢い良く目え目掛けて飛んできたあ！

あんたコメディー向いてるけど、ノリで死にたくはねえよ。

『うわぁ！来るなぁ！あっち行けえ！』

ーーーードン。

硬く閉じた瞳を開けると、20メートル先の壁に、血を吹き出しながらめりこんでいるメディー。

あれ、死んでないよね？

俺、人殺しなんてしたくねえよぉ！

ん？ でもメディーは人じゃなくて悪魔だし。つてか悪魔つて死ぬとどうなるんだろぅ？

『最近セリフが少ない愛さん！お答えは？』

「は？んなもんアタシが知る訳ねえじゃん」

グレた！ 天使なのにグレてるよおい。

「ちっ…能力覚醒か」

ア然とした表情のメルトが呟いた。

能力覚醒…？ これが能力か。俺の能力は攻撃系なのか。

『メルト、早く消えないとお前にも食らわすぞ』

「ちっ…」

メルトは素早くメディーを壁から引き抜くと、消えていった。

「もお！なんでメルトにも食らわせなかったのよ！殺せ殺せえ〜！」

恐っ。グレ愛のキャラ恐いよ。

『あれは脅しだよ。奴らが消えてくれて良かったよ』

どうやら俺の能力の代償は体に負担が掛かるらしい。

腕がプルプル痙攣していやがる。

「まあいいわ。しばらくは悪魔も来ないでしょ。とりあえずやる事は…」

愛が大樹を見る。

「あんた、勉強しなさい」

うん、やっぱりそうだね。

### チヨメディー第三話くやっコメディー来たー！！

「メディー、大丈夫か？」

誰かに呼ばれている。

でも体中が痛くて動けない。

俺は一体どうしたんだっけ…？

うーん…ハッ、思い出した。

俺は人間界に行った時、余りのカッコ良さにファンの女の子複数に追っかけられ、抑え切れない欲望のあまり拉致されてしまったんだ。

ククク、まさか悪魔の俺でも気を失うハードプレイをされるなんて。

しかしこれからが本番だ。今度は逆に俺様がいじめてやるぜ

「あ、生きてた」

ふふ、メルトか。

………何い…！？　メルト？

いけない。確かにメルトは良い奴だし美形だけど、俺達は男同士だぞ！？

ついにそっち系のドアもノックっすか？

だが…メルトが求める以上、致し方ない。

『メルト…』

「うわっ、気持ち悪っ！離せよ！アラーム！！」

もうその呪文やダ…。

「…で、目は覚めたか？」

『ああ、おかげさまで』

妄想から覚めた俺は譲に能力を使われ気絶した事を思い出した。

「メディー、お前は無意識のうちに防御呪文を使っていたみたいだな。そのおかげで死ななかつたんだぞ」

『俺？そんなの使った覚えはないけど？』

「つまり、お前に潜在された魔力が守ってくれたんだろ。見ろ、このネックレス」

あ、それは俺が魔界に来た時、閻魔様からもらった魔后石のネックレス。

砕けてる？

「そうだ。魔后石が砕けるなんてありえない。あの破壊能力はかなり危険だ」

『じゃあどうする？』

「しばらく時間が必要だ」

メルトは成績優秀。その反面、負けず嫌い。

能力者と言っても、たかが人間。

そんな人間に何も抵抗できずに引き返してきたのが悔しいのだろうな。

『そんな難しく考えるなよ！閻魔様だって時間くれたんだからさ。今日は気晴らしに人間界で休息しようぜ？』

難易度が高い仕事程、任務達成までに時間はかなりもらえる。

今回の仕事は最大に危険なため、それなりの準備も必要なわけだ。

その達成期限まで二ヶ月。これだけあれば充分だろ。

「…いや、一刻も早く赤い目を…」

『焦る事はないさ。それに、俺も魔力を使い果たしたらしい。だから今日は骨休み。それに、仕事以外で人間界来たことないだろ？色



々と案内してやるよ』

魔界の娯楽の一つとして、人間界へと行き来も自由とされている。

もちろん人間の姿に変身してだが。

普段、他の悪魔達はけっこう行っているみたいだが、メルトは休みの日も修業や勉強と、ヒッキー君なので、たまには楽しませてやるでしょう。うん、俺って優しい。

「じゃあ行くか」

『あいよ!』

メルトの呪文で俺達は人間の姿に。

尻尾や翼が消え、人間のパーツが組み込まれる。

つてな訳で人間界に到着。ああ、懐かしいねこの感じ。

『人間界の楽しみって言ったら…これだ!』

「キャバレー天国?…人間界にも天国があるのか? いや、そんなはずは…」

もう、メルちゃんったら、分かてるく・せ・に

ハハハ、俺達は18歳だからいいのさ!

ムフフ、いやあ〜読者の方も好きですなあ〜。

まあ俺が中の様子を絶妙なナレーションであなたを官能の世界に招待しようじゃないか！

まだ不思議がっているメルトを引きずり、店内に足を踏み入れると、さすが店名がキャバレー天国だけあって、女の子が天使の格好をしている。

「な…こんなにたくさん天使が！？」

これにはメルちゃんもビックリ！

「こいつら…まさか刺客か！」

それは違う！ 誤解だメルト！！

「メディー、全力でいくぞ！」

『馬鹿、待て待て…。この娘達は皆人間で…。』

「メディーの目もごまかすとはやるな、天使！だが俺は違う！」

もう何言っても駄目だこりゃ。まだメルトには早かったようだな。

…一応、皆に防御呪文唱えとこ…。

「くらええ！アラームラディー！」

よりによって爆発系統の最大の呪文使いやがった…。

「ドバーン」

この日、一つの店が潰れた。俺の防御呪文のおかげで、幸い死者は出なかったが、多くのケガ人を出した。

「君ねえ、困るんだよ。爆弾なんて持ち込まれちゃ……」

そして俺とメルトは違う店の事務所に連れて来られた。

ここはホストクラブ。ま、こういう裏の店はどこも繋がってるって事だ。

しかも皆さん筋者の方達で……。これ俺人間のままだったらビビりまくってるよ今頃。

「これじゃあ、あの店も当分営業できないでしょ？君達には体で稼いでもらうからねえ」警察に連れてかれただけ感謝しなよ！」

ケツ、何が感謝しろだ。警察に調べられたらヤバイのはあんたらだろうが。

ハア……しかしまあ、やっぱりこうなると思ったよ。

「まあ君達、顔立ち良いからすぐお客さん付くよ。まずこれに着替えな」

メルトはかなり美形だからな。下手したらN o . 1になっちゃうんじゃないか？

あ、無理か。メルトは女の子と話すの嫌いなんだった。

とりあえず渡されたのに着替える。

はい、尻尾、翼、角となぜか悪魔スタイル。

「ホストクラブ地獄。ここでは皆には悪魔の格好してもらってるんだ…って君ら妙に似合うな！」

支配人もこれにはビックリだった。

だって…僕ら本物の悪魔ですしね。

つてか男がコスプレとは逆転の発想ですね。

だが、これが以外とヒットしている。店内は活気づいてるし客付きも良い。

「指名入りやしたー！明、亮、同時指名だよー！」

おっと、どうやら早速俺らに指名が入ったらしい。

あ、ちなみにメルトの人間界での名前は亮りやうにした。

さて、お客さんはどんな女性かな？

ピチピチギャルが良いなあ。あと顔良し胸有りで個人的に貢いでくれて結婚したら子供は二人。

二人共女の子で将来パパと結婚する〜とか言ってくれるんだけど俺はクールだから、こらこら、離れなさいとか言うんだけど実は嬉しくて、でも仕事は不景気。リストラされ家族とも離れ離れ…

つて、くだらない事考えてないで…まあ、お客さんはババアだよな。現実はこのまんさ。

『…ご指名ありがとうございます』

「二人共若いのに頑張ってるから、指名しちゃったわ」

ぎゃー！

お前自分の顔よく見ろよ。猿だぜ猿！ しかも語尾に 付けるなよ、つてゆうかお前そろそろ星になれるよ。死期近いもん、あんた。

つてゆーか臭いねん！

この香水、何？ マジ吐きそう…。悪魔の嗅覚は犬より良いんだからね！

メルトの奴も、もう何が何だか分からないって顔してるから俺が稼がなくちゃな…。

『お飲みものはいかがです？』

「いただくわ。何が良いのかしら？」

『この「血の池ブランデー」など、あなたにピッタリかと』

「あら、じゃあそれで」

よし、何とか一番高い飲み物を頼ませたぞ。

どうせホストクラブに来るババアなんて、ろくな事に金使わねえ奴なんだからボツたくったっていいのさ！

「ど…どうぞ」

メルトが吐き気を抑え、ババアに飲み物を渡す。

「う…ん…血の味」

てめえ何知ったかこいてんの？

血は俺ら悪魔の飲み物！！

まあ、その後適当に話を合わせているとボーイが俺のところに来た。

「明、他から指名だ」

『は、はい。助かりました』

ボーイと耳打ちを交わすとババアに頭を下げ、席を起った。

「メディー…」

メルト…後はまかせた！

さて、俺を指名してくれた子は…ゲッ、マジ？

「こんばんわ、明くん」

…マジ？ 舞じゃん。  
なんでホストなんかに？

あ、舞とは幼なじみで、前作のチヨメディーでは暴力女として活躍した。

そもそも、こいつはリョータって言う彼氏がいたのに。別れちゃったのかな？

ってか正体バレたらヤバイよな、これ。

「写真見たら私の幼なじみと似てたから指名したんだよね。名前も偶然、明って言うし…」

ニヤツと笑われた。もしかバレてる？

思い出のために記憶は消さないでくれなんて閻魔に頼むんじゃないかな？  
…。

「もう、あんたはあいつと似てるから今日は付き合いなさい！」

バレてねえー！

舞は頭良いけど、馬鹿だからな。

『今日は飲みましょう！しかし、なぜあなたのような若い女性が一  
人で？』

「リョータだったらねえ！あいつが消えてからねえ！元氣なくなっ  
てねえ！私の事構ってくれないのぉー！」

舞って泣き上戸だったんだ。ってか酒弱いなこいつ。

…リョータは前作で俺の喧嘩友達だった。

何かと突っ掛かってきては喧嘩してたなあ。

「あいつは実は悪魔でしたあ！ってそんなの納得いくかあー！…！  
ウワン」

舞…リョータ…ゴメンな。

急に消えちゃって。

『舞さん、元気出してよ！あいつって奴はきつと、いつも皆を見守  
ってますよ』

「うん…グスン」

『さ、あなたにこんな所は似合いませんよ。お勘定はいりませんか  
ら、リョータくんの所に行きなさい』

「…そうだね、あいつは馬鹿だけど良い奴だったもん」

馬鹿は余計だ。

「ありがと。ご馳走様」

『はい。お客様お帰りでーす！』

…ふう、何とかバレなかったな。



(…………あれ？なんで私の名前知ってたんだろう…………まさか！…………そんな訳ないか。あいつ…明は今頃魔界にいるんだもんね)

—————。

「き…気持ち悪い」

うわ、メルトったらすっかりやつれてるよ。  
しかも顔中にキスマーク。

頑張ったな、メルト！

「君達、お疲れ。今日は上がっていいよ。また明日な」

『はい、お疲れっす！』

よし、逃げよ。

「メディー…魔界に逃げるぞ」

メルトの呪文で一瞬で魔界に。帰って早々、メルトはベットに倒れ込んだ。余程辛かったのだろう。

『あれ…？メルト、ネックレスなんてしてたっけ？』

メルトは首に銀色のガーゴイルのデザインが入ったネックレスをぶら下げていた。

「ああ、さっきのババアがくれたんだ。何でも、二千万で買ったって言ってた。それって凄いのか？」

うん、凄いよ。人間界の金銭感覚は分からないメルトには理解不能だろうけどな。

…にしても、本当にろくな事に使ってねえな。

ネックレスが二千万？

悪徳商業に引っかけちゃったんだな…。

「これでガーゴイルが召喚できるってババアが言ってた。いいもの貰ったぜ…」

いや、それ絶対ウソだよ？

人間はウソつきな生き物なんだよ！？

まあ、とにかくもう寝るか。メルトはすでに安らかな顔で目を閉じてるし。

舞、リョータ…それから皆。俺は元気にやってるよ。

お前らに何かあったら、どこでも俺は飛んでいくからな…。

## リプレイ第四話　スネーク・アイ

悪魔との戦闘も無事やり過ごしたと言っても、まだ油断はできない。

各個人別にさらに能力に磨きをかける事にした。

大樹は猛勉強中。牛乳ビンの蓋みたいなメガネをかけ、打倒悪魔と書かれたハチマキを巻き、必死で遅れを取り戻そうとする姿はクラスで浮いていた。

もうツルツルに滑っていた。

皆の　ああ、こいつ痛い子なんだなあ　と訴える視線が何とも言えなかった…。

とは言え、大樹が漢字を読める様になれば鬼に金棒。  
悪魔が来ても恐くはない。

今日は日曜日。学校も休みだが、大樹は家で勉強してるだろう。

愛はと言つと…

「讓君　見て見て！」

ジャンと目の前に現れましたよ、こいつはあれから俺の部屋に住み着いている。

『おう、米洗ってくれたかうおお？』

こいつは人間界の事をよく知らないのも分かるよ？

食べ物だって違うもんね。

でもね…

『なんで米が泡だらけ？』

「え？洗ってくれて言われたから…洗剤で」

痛い子がもう一人いたよ。

『もういい。俺がやるからあっち行つてろ』

相変わらず俺は施設生活。  
両親に捨てられたからな。

でも、この一年間で施設の人と大分コミュニケーションが取れる様になり、今では、煮物やら野菜やらの差し入れがもらえる様になった。

……そうだ、まだ冷蔵庫に差し入れが残ってたな。

米はもう使えないし、なんとか食えるものを…

はい、冷蔵庫空っぱ

『愛ちゃん？なんかね、冷蔵庫空っぱなんだけど…？』

「あ、おいしかったよ」

全部食いやがったこいつ。

って言ってもたいした量はなかったんだが…

バイトの給料日まであと一週間もあるのに…。

まあ、初めて俺が作った料理を出した時に美味しそうに食ってたからな…。

きっと天界の食べ物なんて味気無い物ばかりなんだろう。

施設とは言え、食事は自給自足。俺の手料理を誰かに食わした事はなかったから、美味しいと言ってくれたのは嬉しいがね。

「でも なべ ってのはダメねあれ。硬くて食べられたもんじゃないわ」

こいつ差し入れの煮物を入れて保冷しておいた鍋も食おうとしたのか…。

はあ、もう昼時か。腹も減ったし今日は外食するか。

愛と初めて外出するけど大丈夫かな？

『愛、人間の姿になれ。外出掛けるぞ』

「はあい」

光に包まれた愛は人間の姿に。と言っても姿形は変わらない。羽が

消え、人間の誰からでも見える様になっただけだ。

私服は…まあセンス良い方かな？ さっき雑誌読んでたからそれをコピーしたんだろう。

天使の力って都合良いな。

『愛、あんま人間離れた事すんなよ』

「大丈夫ナリ！」

すげえ不安。

施設から外出許可を得て、自転車にまたがる。

「これ乗るの初めてなんだけど…」

『ああ、二ケツは俺も初めてだが…まあケガしたって慈悲の能力で直せるだろ？』

「慈悲の能力は自分には使えないの…」

以外な所で新事実発覚！

『まあ、大丈夫だって、行くぞ！』

施設から街まで自転車で10分。ぎこちない運転ながらも無事到着だ。

「飛んだ方が早いね」

うるせえよ。

俺は飛べねえんだから文句言っな。

学生の財布に優しいファーストフード店、マツキユでハンバーグをパンで挟んだものを食う。

『いただきます…ん？食わないのか？』

愛を見るとさつきから一口も食べてない。それどころか口に運ぼうともしない。

『どうした？どっか悪いのか？』

「美食家の私からしてみればですね」

なんかハンバーガーで語り出したよ。

「ボリリュームが足りない」

味より量か！

『仕方ないなあ…店員さん、メガマツ 下さい』

「かしこまりました。メガマク入ります」

メガツクとは、通常の約二倍の大きさ。これならボリリューム満点だろう。

「メガじゃ甘い」

いつから食いしん坊キャラになったお前。

「ギガマツ　で！」

ギガ来たー！

「かしこまりました」

あるのかよギガ。

これはタワーですか？

みたいな感じで運ばれてきたハンバーガー！

これには愛も満足してくれたみたいだ。

店中の注目を浴びながら、結局残さず食べちゃった。

あれほど目立つなって言ったのに…やっぱ無理か。

「ごちそうさま　次はテラマツ　に挑戦したいわね」

財布から断末魔の音がするよ…。

「讓君！あれなに？」

『ん？どれ？』



マツキユを出た時に愛が上を見上げて言った。

視線の先には、屋根の上に馬鹿でかいボーリングのピン。

あ、ここボーリング場だね。

『ここは球を転がしてピンを倒して、そのスコアを競うゲームみたいなもんだ。行ってみるか?』

「うん!」

そっか、天使は人間界は知っていても、実際にやったりはしないんだな。

愛にとっては普段俺が何気なく遊んでる物がどれも初めてで楽しいんだろうな。

—————。

『どうだ、愛?ボーリングって楽しいだろ?』

「うん でも私、譲君に比べるとヘタだよね……」

『俺とはやってる回数が違うから仕方ないって!それに、ハイスコアが50の人なんていっぱいいるから』

「……………それ嫌み?」

愛はボーリング初経験だから3ゲームやってハイスコアが50でいじけている。

ストライクもスピアも取れなかった。

まあボーリングを上手くなるコツは、とにかくたくさんやる事だ。ゲーム数を重ねていけば誰でも上手くなるさ。

ボーリングは経験。

ちなみに俺は男友達と来る時は最低10ゲームは投げる。

そんな事をしょっちゅうやってるもんだから、利き腕じゃない左でもフックボールを投げられるようになり、ハイスコアは202だ。

今も3ゲームの平均スコアが150を上回っているから、愛は自分に自信を無くしている。

もっと楽しませるはずだったんだがなあ…。

「譲君ずるいよお！絶対 破壊能力 使ってるでしょ!？」

使うかよ、そんなの。

もし使ったらピン粉々じゃねえか。

愛は負けず嫌いだからな…ボーリングは楽しくやるのが一番なのに。

「おいおい、このレーン汚ねえな!」

「まあいいじゃねえか！とにかくやろうぜ！」

うわ…隣のレーンにヤンキー二人組が来ちゃったよ。

B系のダボダボのスボンにあきらかにサイズのでかいシャツ。キャップ、バンダナ、グラスンで完璧ですよ。

でも男二人って痛いよ

「おらあ！」

こいつら…

「なんだよ…ストライクの音がいまいちだな…」

上手い…。

だが、マナーが悪い。

お前ら未成年だろ。煙草なんか吸いやがって。

しかもちゃんと火い消せよ。ってか吸い殻が灰皿からこぼれてるから。

「ねえ…もう辞めない？なんか隣の人達ウザいから私キレそうだよ…」

可愛いげな声で言っても内容恐いんだけど…。

『そうだな。これ最終フレームだし。あ、次俺の番か』

11ポンドの球を持ち、中指と薬指を穴に入れ、目線はピンではなく、手前のスパットを見、神経を集中。

隣の奴らに俺の自慢のフックボールを見せてやるぜ。

…と、投げようとした時、隣の奴が先に投げやがった。

こいつら…ボーリングのマナーも知らないのか？

隣同士のレーンで、投げる位置に同時に構えてしまった場合、右のレーンの人に投球権を譲るのがマナーだ。

…ん？ 譲に譲る…？

上手い！！

…はい、滑りましたあ。

ツルツルでございます。

まあ…皆もボーリングをやる時は注意してね

「おい、隣の女のスコア見ろよ。ハイスコアが50って…」

「プツ…可哀相だから笑うなよ」

その声はもちろん愛の耳にも届いた。

こいつら…もう我慢できねえ！！

『おい！あんたらしい加減にしるよ』

俺はヤンキー二人組に絡んだ。

「ああ？んだよ teme エ！表出ろや！」

さぞかしご立腹のようですね。

『フツ、ここはボーリング場だぜ？ここは一つ、ボーリングで決着をつけようぜ？』

「…ハ？……ハハハハハ」

俺の交渉に最初はア然とした表情を見せたが、態度は一変、次は大笑いへと変わった。

「おい、俺らマジ上手いぜ？見てたたる？」

『ああ、君ら得意そうだけど俺も自信があってね』

「ま、良いけどね。ただし、負けたらその可愛い彼女…今日一日俺らの命令に従ってもらうよ？」

ひええゝなんて嫌らしい。

ってか何このベタベタな展開は…。

「…譲君、もし負けそうになったら能力使って良いからね？」

いや、ボーリングに関しては自信がある。能力になんか頼らず…

『守ってみせるさ』

「守ってみせるさ…だって！ププ。愛ちゃん？君もこのゲームに参加するんだよ？二対二だよ」

…マジですか？

『あ…愛？』

「あ…アチキも！？」

「一投交代でスコアが高い方が勝ちね ルールは簡単、ゲームスタート」

そう言うのと勝手にヤンキーが投げ始めた。

「じゃああーストライク！！」

先制されました。

「ど…どうしよう…」

『大丈夫だ愛！一投目はお前が投げろ。残ったピンは俺が全部倒してやる！』

「う、うん」

自信なさげに投げた愛のボールは見事にガーター。

「ヒヤハハ、おいおい大丈夫かよー」

今に見てろよヤンキー共。

俺が全て倒せばスピアになる。

10番ピンに向かつて一直線に放たれたボールは、ピン数メートル手前で、その回転力で曲がり、1番ピンと3番ピンの間に命中。

快音と共にピンが弾け、一本も残さず、全てを倒した。…これでスピア。俺達も負けていない。

『いいか、愛。スピアの後はいっぱいピンを倒すんだ。ガーターだけは勘弁してくれ』

「よし、分かった」

自信満々に投げた球はガーターの溝に一直線

コイツ何も分かってねえや

「シールド!」

ガン

コイツ、ガーターに落ちる手前でシールド張って球の軌道変えやがったあー!

「慈悲の能力は回復だけじゃなくてバリヤーも張れるのよ」

完璧なルール違反

ヤンキー達も首かしげたら。

その後も順調にスコアを伸ばすヤンキーに対して、俺達も食らい付く。

後半の5フレームから愛もコツを掴んだのか、シールドを使わなくてもピンを倒せるようになった。

現在9フレーム目。

わずかに俺達がリード。残り後2フレーム。  
このまま逃げ切りだ。

「さあて、本気で行くかな!!」

そろそろ火が点いたのか、ヤンキー達はここでストライクを取る。

俺達も負けじとスピア。

運命の最終フレーム。

ヤンキー達はスピアを取り、ボーナスとも言える三投目に10ピン倒し、スコアが158となった。

俺達のスコアは9フレームを終わり140。  
しかし、スピアを取っているので、勝利条件は、俺がスピアを取り、



三投目に愛が一本でも多くピンを倒してくれれば…

愛にピンの計算は複雑で集中もできないだろうから、あえて黙っておく。

『気楽に投げろ』

「うん」

そして第一投目。

ストレートに投げたボールはシールドを使わずに1番ピンに命中。

……しかし

「ヒヤハハハハハハ！どうすんの彼氏！スネーク・アイだよ！」

そう、これは俺が想像していた最悪のパターン。

スネーク・アイとは、7番ピンと10番ピンが残ってしまい、スペアを取るの極めて困難だ。

一番奥の両端のピンが蛇の目に見える事からスネーク・アイと呼ばれている。

それより最悪なのがスコアだ。

140(9フレーム) + 8(スペア) + 8(10フレームの一投目)  
|| 156

ここで1ピン倒しても、ヤンキーの158には負けてしまう。

ど、どうする……。こうなったら破壊能力使うか？

いや、いくらなんでも一般人の目の前でそれはマズイな。

…愛はバンバン使ってたけど。

こうなったら奥の手だ。

「じ…ごめん」

『気にするな。今日初めて1番ピンに当たったじゃねえか。次はストライク取れるよ』

「おいおい、次はもうないよ！俺達の勝ち決定じゃん？」

『バーカ、あと3ピン倒せば俺達の勝ちだろ？』

「3ピン？目え見えてる？君らのレーンには残り2ピン。しかもスネーク・アイ。どうやって勝つんだよ」

『こっやんだよ！』

俺が投げたボールは勢い良く……………

放物線を描き隣のレーンへ

『じゃああ！3ピン倒れた！俺達の勝ちだ！』

「てめえざけんなよ！ボーリングのマナーも知らねえのかよ！！」

『マナーを知らないのはてめえらだろうが！！』

俺の怒鳴り声で一瞬ひるんだヤンキー。

『いいか、ボーリングは他のお客さんに迷惑がかかるような事はしちゃいけねえんだ。』

俺が隣のレーンに投げた時、あんたら迷惑だっただろ？

その気持ちをずっとあんたらは他の人達に味わらせてたんだぞ？』

「ぐっ…負けたくせに説教かよ」

『じゃあよく見てろ』

俺はボールを持ち、一番端っこに立つ。

10番ピンの前から投げたボールは対角線を描き、7番ピンの左側のガーターへ。

しかし勢い余って、溝からはい上がったボールは、7番ピンを弾き、90°の角度と飛んで行く。そのまま10番ピンも倒した、スペアだ。

『見たか？これがスネーク・アイ攻略法だ』

危ねー！

カッコ付けちゃったけどスネーク・アイ取れる確率は五分五分だったのに。

まあ、普通は50%で倒せる奴なんていないけどね。

ヤンキー達はア然としていた。スネーク・アイを倒せたのを見た事がなかったんだろう。

『愛、まだ三投目が残ってる。次はストライク取れるよ』

俺はニツコリと微笑む。

実際、1ピンでも倒せば勝ちだが…

愛はこの一投で初めてストライクを取れたのだった。

—————。

「あゝ楽しかったね」

『そうだな。しかし、お前の罰ゲーム、最悪だぞ、あれ…』

「え？そう…？」

『あんた達がピンで私がボールね とりやあー！……………あいつら絶対トラウマになったよ』

「乙女が体を賭けたんだから当然でしょ！」

まあ、確かにな。

でも、いくら女の子って言っても愛は天使。

元々の潜在能力は人間と比べ物にならない。

ヤンキー達も可哀相に。

女の子に喧嘩負けましたってなったら恥さらしも言いトコだな、うん。

「人間界って楽しいなあ」

『俺も最近、それに気付いた』

「讓君はずっと居るのに？」

まあ、一年前までの俺の暮らしなんてクソだけだな。

愛に救われて…大樹を初め友達ができて…

この一年間は、何もかもが楽しかった。

友達と遊ぶのがこんなに楽しいなんて知らなかった。

だから初めての事で、はしゃぐ愛の気持ちも分かる。

愛には助けてもらったから、チーム内で唯一の攻撃手段を持つ俺が、今度は愛を守ってみせよう。

「私、ずっと人間界に居たい！だから、悪魔なんかに譲君を渡して  
たまるかぁー！」

ハハハ、頼もしい天使なこと。

『帰るぞ、乗れ』

「うん」

今日は俺もはしゃぎ過ぎたな。疲れちまったぜ。  
まあ、楽しかったからイイや！

「譲君……」

『ん？どうした？』

「晩ご飯……何？」

……しまったぁ！

冷蔵庫は空っぽだった！

せっかく和やかな感じだったのに、結局はこんなオチかよ。

『愛、戻るぞ！晩飯のおかず買わないと！』

「え？もう9時50分だよ？スーパーの閉店まであと10分！」

『間に合わなかったらおかずなしだ!』

「それはヤダア〜!」

『だあー!間に合わねえ!飛べ、愛!』

「ラジャー!!」

愛がいる限り、疲れそうだな。…まあ、暇にはならんだろうな。

## チヨメディー第四話　僕とメルトはこうして出会った

「……………」

『どうした、メルト？出だしからボーツとして』

メルトは二段ベツトの下で朝からボーツとしている。

寝起きは良い奴だから頭が回らないって訳でもなさそうだし…。

ちなみに俺は二段ベツトの上からメルトを見下ろす体制だ。

「いや…メディーと初めて会った時のコト思い出してた」

もう、メルちゃんったら

こうゆう恋人同士の雰囲気、嫌いじゃないわよ

「…………キモっ」

素でへこむから、つまらなくてもツツコミはくれ。

しかしまあ、メルトとの出会いか…。

あの時の俺は魔界に来たばかりの右も左も分からない奴で、メルトがいないと大変だったのを覚えてる。



――

「あ、回想シーン入るの？」

『うん』

「じゃあ俺視点ね」

『ダメ。コメディじゃなくなる』

「アラームラディ……」

『好きにしてください！』

――

はい、入りました回想シーン。

俺にコメディの視点は場違いだと思いが聞いてくれ。

幼い頃から成績優秀。難しい呪文も使いこなし、その中でも爆発系アラームなどの呪文をメインに使ってきた。

わずか7才にしてデビルAランク入り。

《天才》

いつしかそう呼ばれるコトにも慣れる。

その反面、努力をしなくても人並み以上なコトができてしまう俺は、周りから冷めた子だとも言われていた。

友情など、くだらない仲間意識は仕事上、命取りになると本で読んだため、他人との関わりを避けて来た。

18才を迎え、デビルAの頂点に立つ。もはや大人でさえも俺の実力を認めていたはずだ。

だが、無愛想な俺を祝福してくれる奴はいなく、むしろ妬まれる立場。

それは俺が望んだはずの事。なのに、なぜか淋しかった。

今日も仕事を終え、家に帰ろうとすると、目の前の人間界のワープゲートから一人の悪魔が出て来た。

最初見た時は冴えない奴だと悟ったし、不審な行動もとる。

まるで、初めて魔界に来た人間の様な動き…。

そいつがメディーだった。

『うひょおゝスゲエ！ここが魔界かぁ！…ん？』

（お…！やつと俺が出てきたか）

「…あ」

ここで目が会ってしまった。

『あんたもサターンなの？』

俺がサターン？ こいつ、悪魔のくせに俺のコト知らんのか？

(いやあ〜この時は階級があるなんて知らなくてさ)

「俺はデビルAのメルト。あんたは？」

『サターンのチヨ・メディーだ』

…ハア！？

こいつサターンなのか？

「じゃあ、ちようどいい」

『おう、ちようどいいだろ！……何が？』

ランクを昇格させるには、そのランクの相手の血を奪う事が条件だ。

デビルAからデーモンを飛ばし、一気にサターンになれるチャンス。

見たところ、コイツから魔力のかけらも感じない。

「奪血の礼、愚かなるデビルの愚行をお許し下さい」

『奪血の礼……？ちよ……お前何言って………うわあ！？』

俺は補助呪文で、爪の長さや固さを強力に増すと、それでメディーに斬りに掛かった。

ギリギリで避けられたがな。

（この時はマジ死にかけたからなあ）  
（…スマン）

「呪文使わないんですか？あんなナメてるとマジで殺しますよ」

『何言っただって！待てよ！』

チツ…サターンクラスのくせに逃げ腰かよ。

って事は…

「サターンは嘘なんだな？今なら許す、正直に言え」

こういう輩がいるんだよ。

この前も俺はデーモンだとか言っただ奴に奪血の礼を交わしたら、デーモンは嘘でしたとか言われたしな。

あ、奪血の礼って言うのは、儀式みたいなもので、いわば挑戦状だ。

申し込まれたら必ず受けなくてはいけない。

そのかわり、申し込まれたら、相手を殺しても文句は言われないというもの。

ランク昇格は己の力と相手の力の差を見極められる能力。

命の損失の代償を背負うものだ。

『よくわかんね。でもケンカなら買っぜ?』

やっとやる気になったのか、目付きが変わった。

だが攻撃は、何の変哲もない、普通のパンチ。

…のはずだ。

拳から魔力を感じない。

これは普通のパンチ。

なのに…

なぜこの俺が避けられない!?

『オララララ！ダリア！トリヤア！フウ、疲れた！』

「グッ…どんなトリックを使った？」

（人間から悪魔になるによって、筋肉が増強して、体が軽くなった気がしたから強くなったんだね。解りやすく例えるなら、超クソ重たい重りが外れたって感じ）

くそ…さすがサターンだ。

『魔力？今のは普通のパンチだけど？お前弱くね？』

やはり普通のパンチか。

呪文を使わずにこの強さ。

だが、見たところ同年代。なのにこの差は…

負けたくない

「アラムラディー！」

アラムラディーは爆発系最大の呪文。

俺の使える呪文の中でも最強の呪文だ。

ドバーン…と周辺に巨大な爆発が起こる。

砂煙が晴れると…

「危ないじゃろ！バカモン」

なぜか閻魔様がいて、メディーをかばっていた。

「間一髪セーフじゃった…ん？あ、ヒーローは遅れて登場するものだろう？」

今、閻魔様言い直した。

「説明が必要だな、メディー、メルト。ついてこい」

そして呼ばれた俺達は、メディーが人間界で育った事など、秘密事項を教えられ、こうして運命共同体になった。

――――

『あ、終わった？』

「ああ、まさにコメディータッチだったろ？」

『ドコが！？この話のドコに笑える要素があつたの！？むしろバツクボタンで戻った読者の方が多いよ？』

「ムッ！？じゃあメディーの人間時代の話してみろよ」

『フッ…お安い御用さ』

—————

あ、回想シーン入ります。

（分かってるよ）

目覚ましの音を一切無視。自然と目が覚めるまで寝る。

時計の針は午後4時。

遅刻どころか、帰りのHRが終わる時間である。

《お寝坊さん》

いつしかそう呼ばれる事にも萌える。

（お前バカにしてんのか？）

では次の日。

昨日は軽く15時間は寝たはずなのに、夜また寝る。

今日は彼女のモーニングコールで目を覚ます。

（ホウ、メディーは彼女がいたのか）



「家が近ければ毎日起こしに行くのになあ……」

そんな事で悩んでくれる彼女に、朝起きられない事に罪悪感。

（いい彼女じゃないか）

そして支度を整え、家を出ると、女が待ってる。

俺と一緒に駅まで行きたいらしい。

（え……？彼女の家は遠いんじゃないか）

『テメエわざわざ来んなって言っただろ！？』

（……あ、付き纏われてるのか）

「だって一緒に行きたいんだもん……」

『仕方ねえな……ほら、手』

いじける女は俺と手を繋いで歩く事で機嫌を直してくれたようだ。

（……は？オマツ……）

そして女を駅まで見送る。

そして今日は地元的女子高で学園祭が行われている事を思い出す。

『フツ……あいつの為に顔くらい出してやるか』

（お前何人彼女いんだよ！！つか学校行けよ！）

女子高の学園祭が平日にやるのは、生徒だけの学園祭。つまり、一般公開はしないのだ。

その理由は女の子目当ての男を校内に入れないため。

しかし、生徒全員の署名運動のおかげで俺だけ入園が許可される。

そして、歩く度、目が合う度にメアドを聞かれてもう大変。

そんな俺を良く思わないのが幼なじみ。

独占力が激しいツンデレ系だ。

『よお』

俺が挨拶したにも関わらず…

「何しに来たの？」

と、冷たい扱い。

しかし、署名運動を立ち上げたのが、実はコイツなのだ。

さしずめ、演劇部でヒロイン役をやる姿を俺に見て欲しいのだろう。

さらに、この学校には俺の妹もいる。

クラスの出し物で《カレーそば》という前代未聞の挑戦クラス。

しかも食べに来てと言われたから質が悪い。

ま、普通の女からの誘いなら断っているが、妹のためなので仕方なく行つてやる。

ドアを開けると、女の子全員の視線が俺に注がれる。

「あ！お兄ちゃん」

俺に気付いた妹が駆け寄ってくる。

カレーそばを渡され、席に座り食べてみるが、案外うまい。

完食後、退室。教室からは《マジ格好イイー！》とか《超好き！明日告白するから！》など戯言が聞こえるがあえて無視。

しかし、どうやら教室に

携帯電話を落としてしまったみたいだ。

急いで取りに戻ると、妹が質問攻めにあっている。

《彼女いるの！？》とか《好きなタイプは！？》など、俺に関する事ばかりだ。

だが、当の本人がいるのに気付いていないみたいだ。

『あの…携帯忘れちゃって』

「……………！！」

やっと俺がいる事に気付いた女共は、《キャー、さっきの事聞こえちゃった？どうしよう…恥ずかしい…》とか思っているに違いない。

（あの…メディー？）

そして複数の女に引つ張り風の俺。

（おい！メディー！）

しかし運悪く、現場にツンデレ幼なじみが登場。

（もついい。辞めろ）

泣きながら走り去る幼なじみを捕まえ二人はそのまま……

（アラームラディ…）

はいゴメンなさい。

—————

回想シーン強制終了。

「…で、どこから嘘？」

『次の日、辺りかな』

「ほぼ全部嘘じゃねえか！」

## リプレイ第五話　ブレイクショット

今日は、この前回来たボーリング場にまた来ている。

理由はビリヤードをやりにきた訳だ。

ま、同じフロアにビリヤード台を発見した愛は、どうしてもやりた  
いと駄々をこねたので連れて来た。

どこのボーリング場にも大体ビリヤードはあるからな。

それにしても、最近は愛のわがままに付き合っのが多くなってきた  
な…。

ちなみに今回は大樹も一緒だ。

何でもコイツは、あれから猛勉強のおかげで全国模試で五本指に入  
る程頭が良くなっていた。

本人いわく、読めない漢字はないらしい。

完璧だよ、大樹くん！

さらにさらに、看破能力に応用編と言うか、必殺技まで編み出した  
らしい。

ホント、頼もしい仲間なこと。

## ビリヤード

ルールは簡単だ。

基本、球は白い球をキューと呼ばれる細長い棒で打ち、球に当て、四隅と長方形の台の真ん中に開いた、計六つの穴にボールを落とすしていくゲームだ。

今回俺達がやるのは、《ナインボール》と言って、1から順番に落としていき、最後の9番ボールを落とした人が勝ち。

俺もビリヤードは経験が少なく、愛はもちろん初めてやる。

大樹はやたら自信満々だ。

「じゃあいくよ。まずはブレイク・ショットから…」

ブレイク・ショットとは、最初に白い球で、指定の位置に定められた9個のボールを弾く事だ。

この役目は大樹が勤める。俺達がやっても、そんなに弾けそうにないからね…。

パァン！

快音と共にボールが弾け飛び、5、7番ボールがポケットに落ちた。

大樹キモいぐらい上手いんだけど…。

ボールを落とせたら、もう一回打つ事ができる。

最初は1番ボールからだ。

なんかもつ普通に大樹は次々とボールを落としていく。

俺達に順番が回ってこねえよ。

つかキモいよ。

「ああー！大樹君能力使ってるうー！インチキだインチキ！」

うわ…マジだ。目が赤い。

「フッフ、看破能力を使えば台にこの角度へボールを打ちなさいと光が浮き上がるのさ」

ズリイよテメエ。

「ハハハ、クッションボールを使えば僕は無敵だあ！」

クッションボールとは、壁に当ててボールを跳ね返し、ターゲットボールに当てる事だ。

これが普通は難しい。

どの角度で当てれば良いのかが掴めないからだ。

しかし大樹は能力で入射角を看破している。

オマエ、ゲームで能力使うなよ。



「こんな難しい角度だって…ほら！」

クッションボールでボールに命中。吸い込まれる様にポケットへ向かう…が、

「シールド」

はい、愛のシールドでポケットが塞がれましたあ！

「…なっ！」

「私も応用編でこんな事ができるのよ」

ポケットにはバリヤが張られている。これじゃ穴に入るわけがない。

つか、オマエら《能力》を何だと思ってんだよ…。

「まあ、能力なんか使わないでね」

愛がプンプンという擬音が似合いそうな感じで大樹に説教している。いや、お前も能力使うなよ。

「ハハ、ゴメンゴメン。能力を使わなくてもビリヤードならやった事あるから、ある程度なら教えられるよ」

と、ゆるいわけ。

大樹のビリヤード教習が始まった。

構え方、力の入れ具合など、基本的な事は教わった。

「その調子だよ愛ちゃん！」

愛はコツを掴んだのか、短時間で見事な成長を見せた。

「それに比べて…」

「讓君は…」

わーい、二人の視線が痛いよ

『仕方ねえだろ、人には向き不向きがあるんだよ！』

止まっているボールを棒で突くだけのゲームなのに、なぜか上手くいかない。

手前の白い球を奥の球にすら当てる事ができない。

『くそ…ボールがもつと大きければなあ』

「あ、じゃあ愛ちゃんの胸で練習してみれば？」

「やだあゝ それセクハラよ大樹くん シールド」

人一人スッポリ収まる大きさの半球のシールドが大樹を閉じ込めた。

「出れねえー！！！」

『ハハ、変な事言うからだよ。それに愛の胸だつて突きやすい程大  
きくな……』

……あ、

……やべえ。

「シールド」

……出れねえー！

――――。

その後、何とか愛の機嫌を取り戻した俺達は、ようやくシールドか  
ら出られる事ができた。

うん、これは禁句にしよう。

「さて、今日もたくさん遊んだし……」

グイッと愛が大きく背伸びをする。

「そろそろ修業しところか？」

いきなりか！

「え？僕ずつと勉強してたから今日はもつと遊びたいんだけど…」

「ダメ！いつ悪魔が来るか分からないんだよ！？」

まあ…確かにそうだけど…ねえ。

『修業つつたつて、何やんだ？』

「讓君は破壊能力のコントロールね。大樹君は…自分で考えなさい」

適當…！

ま、能力のコントロールは大切だな。

力を抑えないと無駄に俺の体に負担がかかるからな。

「あ…じゃあ僕は能力に磨きかけてくるね」

そう言つて大樹は歸つてしまった。

ま、真面目な大樹に限つてサボりはしないだろう。

残された俺と愛は近くの公園に来た。

「じゃあまずは、この空き缶の真ん中だけを破壊して」

公園のベンチに縦に並べられた三つの空き缶。

『真ん中だけ…か』

精神を集中…。力を抑え、ターゲットだけを黙視。

『能力発動』

みるみる俺の瞳は赤くなる。狙いは真ん中の空き缶！

くパァンく

アルミの缶があつという間に弾け飛ぶ。

…前の空き缶以外。

「まだ力をコントロールできてないね。もし後ろにいたのが私達だったら、巻き添いを喰らってるトコよ？」

失敗。

確かにこの能力は危険だ。愛や大樹に危害を及ぼす可能性だって充分にある。

『もう一回だ…！』

—————。

すっかり日が暮れてきたな。もうクタクタだよ。

何とかコントロールはできるようになった。

あの後も、揺れたブランコの上に置いた空き缶で、動くターゲットの破壊など、公園にある遊具で効果的な実戦をさせてもらった。

そのおかげで今日は充実した一日だったのではないだろうか？

『もう10時過ぎか、そろそろ帰るか』

「そうだね、お疲れ様」

愛と公園を出ようとすると、向かいの店から大樹が出てきた。

…手に大量の景品を持って。

大樹が出てきた店：《パチスロ ジャンジャン バリバリ》。

「ハーハッハ！僕の看破能力を使えばどの台が出るか一瞬で分かるよ！……………あ」

へえゝ 俺が修業してる間にパチスロかあゝ

しかも、まったく知らない事に能力使ったね君。

『破壊能力』

これで大樹の持っていた景品が木っ端みじん

「うん、コントロールできるようになったね」

『だろ？』

「だろ？…じゃないよ！ああー今日の勝ち分がぁ…」

ハッ、高校生がパチスロなんかやるんじゃない！

## チヨメデー第五話　今回笑いの要素ゼロだぜ

今更言つのもなんだが…

気になる…

気になりまくる。

俺の父さんは名高いサターンと聞いたが、どうゆう悪魔だったんだろつ。

なんで俺は未熟児として生まれ、人間界に送られたのだろう。

気になって夜も眠れねえぜ。

よし、こうゆう時こそ閻魔様に聞きに行こう。

『閻魔様！』

深夜だというのに閻魔様の部屋を訪れてみた。



「ふあゝ…何？こんな時間に」

閻魔様は寝入る所だったようだ。見かけ十歳くらいの容姿にパジャマ姿の閻魔様は、ちよつと可愛かった。

「ワシが完全に寝ている所で起こしたら打ち首ものじゃぞ？」

サラッと恐い事言わないで下さい。

つてか小学生みたいな顔で一人称が『ワシ』。

さらに語尾に『じゃ』など、顔に合わない事を言う。

『あ、すいません…。ちよつと、父上と母上の事で気になって…』

生まれてこの方、一度も両親の顔を見た事がない。

物心が付いた頃には、既に人間として育ち、自分が悪魔と気付かないくらいだったからな。

「う…メディーの親…」

閻魔様はかなり困った顔をしている。

辞めてよ、なんか聞くの恐いじゃんか。

「メディーももう大人だしのお…言ってもいいか」

ゴクリ…。

「まず、これがメディーの父親じゃ」

閻魔様の右手から、ブンツと音と共に、映像が出てきた。

そこには一人の悪魔。

ごっつい顔に鋭い目付き、武将ヒゲが似合うダンディーな印象。

この人が…俺の父親。

「で、こっちが母じゃ」

今度は左手から映像が飛び出す。

優しい顔立ちで、シワが一切なく、まだ若い。

細い目で常に笑顔を保ち、なんでも平気でこなしそうな印象…。

そして……

母親は……人間だった。

「そう、父は悪魔。母は人間。だからメディーは未熟児として生まれたのじゃ」

だから生まれたての俺には尻尾や翼がなかったのか。

「もちろん、これは魔界の掟破りじゃ。なぜ二人とも死んだか、気になるじゃろ？教えてやるわい」

――

あ、回想シーンに入るぞ？

（そのネタは前回俺がやりました）

メディー父親、マディー。サターンとして数々の伝説を残した最強の悪魔。

しかし、あろうことが、マディーは仕事で命を奪いにいった人間に心を奪われてしまった。

その女性こそが、メディーの母親、沖本 明美さん。

重い病にかかってしまい、二年間の入院暮らし。

その人生のピリオドをマディーが打ちに行ったわけじゃな。

しかし明美さんには霊能力があったらしく、マディーが鎌を振り上げた瞬間が見えてしまったのじゃ。

明美さんは、『これが私の運命』と、マディーにニツコリ笑ってみせたそうじゃ。

その笑顔に心を奪われたマディーは、命を奪う事ができなかった。

それどころか、禁断の呪文で明美さんの病気を治してしまったのじゃ。

こうなればメディーは魔界から追われる身。

結局二人共、追つてに捕まり殺されてしまったのじゃ…。

しかし、明美さんの死体を片付けようとした追つてが、何かに気付いた。

妊娠している事に。

悪魔と人間の子供。

それは人間界にバレてはマズイ。

その追つては、腹の中から子供を引き抜くと、魔界に連れて帰ってきた。

その子供こそ、メディー。お前じゃ。

姿形は丸つきり人間。

悪魔として育てても、自分だけ格好が変だと悟られるだけじゃ。

そこで、人間界に送ったと言うわけじゃ。

—————。

やっと真実を教えてもらった。だが、なぜこんな結果になったのか。

仮に、父さんがあの時、母さんを助けなければ、俺はこの世にいなかった。

魔界の掟は絶対だ。

だが、両親を殺した追つてを怨んでいないかと言ったら嘘になる。

『誰が俺の両親を殺した…？』

「同じサターンのマルト。メルトの父親じゃ」

メルトの親が俺の両親を殺したって言うのか！？

「じゃが、マルトは既に死んでいる。マディーとマルトは親友じゃったからな。同じサターンを殺すなど、辛い仕事を引き受けたのは、外ならぬマルト、自ら引き受けたのじゃ」

…そつか。そんな辛い決断をしたんじゃ責められねえや。

メルトに当たったって仕方ねえしな。

『ありがとうございます。閻魔様』

俺は頭を下げると、トボトボと部屋を出て、おとなしく寝床に着いた。

…涙が止まらなかった。

## リプレイ第六話「お疲れ様」が言いたくて

『お疲れ様でしたあ！』

「お疲れ！帰り道気をつけてな」  
『ウツス！』

いやあ、今日も働いたなあ。

俺は学校に許可を貰い、生活費を稼ぐ為にバイトをしている。

学校が終わり、夕方6時～夜12時までの6時間労働。

バイトと言うより、仕事だ。

製品工場で働いていて、かなり給料が良い。

週に四日も入れば、生活費としては充分な額になる。

施設に入れる金はごく僅かだし、学費は家庭の事情から免除されている。

よって出費は食費だけで済むのだ。

愛に留守番を頼んでいるから、早速帰らなくては。

『ただいまー…』

「ムニヤムニヤ…」

『おい、こんな所で寝てると風邪ひくぞ？…エアコンもつけっぱなしじゃないか…』

「……ムニヤムニヤ」

…起きない。

まあ仕方ないと、愛をソファからベットに運ぶ。

俺が家に着くのは深夜1時だ。無理もない。

とりあえず汗を流すためにシャワーを浴び、飯の準備に取り掛かるべく、台所へ向かった。

よしよし、ちゃんと愛は俺が用意しておいた夕飯も食べたようだな。

仕込みが済んだ状態の煮物を温め、白米のおかずにする。

派手な味はないが、疲労と手間を考えればこれがベストなのだ。

綺麗に平らげた後、食器を洗い、俺も寢床についた。

――――。

朝、十分な睡眠時間は取れていないが、学校のため重い瞼を懸命に開く。

『……ねみい』

睡魔に負けてポックリ逝きそうになった。

「讓君！朝だよー！！」

『ぐはあ！』

しかし睡魔は愛のジャンピングボディプレスによって消え去った。

「さ、学校学校」

『なんか今日テンション高いな』

「そりゃそうだよ。今日はアタシも行くんだもん」

『そっかそっか。じゃあサッサと準備して…ハアア！？』

コイツ今なんて言った？

学校に行く？

「早くうゝ遅刻しちゃうよ！」

時計の針は家を出る時間に迫っていた。

昨日の疲れからか、寝坊してしまったらしい。

『やべっ、早く行かなきゃ』

速攻で制服に着替え、鞆だけ持ち、勢い良く玄関を飛び出した。

「もっと速く走れないの？」

『俺は人間だ。お前みたいに飛べないの！…ってか着いてくんなあ  
！』

遅刻ギリギリで間に合った。結局、愛は着いて来てしまった。

『姿は見えないようにしとけよ』

「分かってるナリ！」



うん、すげえ不安だつて。

「おはよう譲君…と、なぜ愛ちゃん!？」

『おはよう大樹。…なんか着いてきた』

「だってヒマなんだもん」

ま、おとなしくさせとけば良いか。

大樹以外の人間に見えてないよね？

そんな不安を胸に教室を開ける。

すでに出席を取っているところだった。

「木下ー…遅刻ギリギリだぞ…ん？」

担任の野中先生。<sup>のなか</sup>教科は家庭科を教え、歳は30近いらしいが、全然若く見える。

落ち着いた茶髪を巻いていて、結構美人。男子生徒に人気高し。

でも性格はちょっと悪い。

そして忘れてた…

野中先生は…

「おい、譲。その可愛い子ちゃんは誰だ？」

靈感が最強に強かった事に…。

—————

「ほう、この子は天使なのか。こりやまた珍しい」

「すごいね先生！人間から見えないようにしてたのに」

「私の靈感をナメるなよ。低レベルな霊ごときだったら除霊だって可能だ」

ここは調理室。HRは中断し、俺、大樹、愛は野中先生に呼び出されたわけだ。

バレた事をヒヤヒヤしてた俺だったが、愛と野中先生はすっかり仲良くなり、心配してた俺がバカみてえじゃねえか。

「譲もスミに置けないねえ。こんな可愛い天使といっしょなんて」

「ホントだよ。譲君ったら毎晩アタシに色んな事を強制で…」

「何！讓君ってそんな人だったのかぁー！」

待てコラ。

変な事いうんじゃないよ。

「まあ、愛は私が預かってやるから。お前らは授業に戻れ」

『あ、お願いします』

まあ野中先生と一緒になら心配ないな。俺のクラスの授業に家庭科はないし。っていうか、家庭科があるクラスは、ほんの一部。

よって野中先生はほとんどがヒマで、調理室も独占している状態だ。

うん、心配しすぎは良くないな。

そんな安心感からか、疲労からか、授業中に睡魔がやってきて、ポツクリ逝ってしまった。

「調理室から火災警報が出ました。生徒の皆さんは、待機して下さい」

そんな放送が入り、慌ただしく走る先生達。

そんな事が起きているなど知らず、俺はまだ夢の中にいた。

「ゴメンなさい…」

放課後、俺と愛は改めて野中先生に謝りに行った。

「ハッハッハッ、気にするなって。愛も反省していることだ！それより譲、仕事、遅れるぞ？」

ヤベツ、今日も仕事入ってたんだった。

『あ、じゃあ俺帰ります！ホントすいませんでした』

「気をつけてなあ」

「さ、先生。早くあの続きを…」

「ああ、分かってるよ」

—————

学校もギリギリ。仕事もギリギリ。

今日は疲れる日だったなあ。

あ！ 愛の夕飯の支度してなかった！

…怒るだろうなあ。

『ただいまあ…って何だコリヤアア！！』

酷く散らかった台所。

床に飛び散った卵に水に食器…。

「ムニヤムニヤ…」

そして、いつも通りソファで寝ている愛。

『起きろ愛…ん？』

テーブルの上に置かれた、なんとも形の悪いオムライス。

そこにはケチャップで丁寧に

《おつかれサマ》

と書いてあった。

『不器用なお前がよく頑張ったな』

さしずめ、野中先生に教えてもらってたんだろ？

火災警報機を鳴らしたのもこれが原因か。

愛の手に巻かれたバンソウコウ。

満足にフライパンも持てないくせに。

自分には慈悲能力が使えないくせに。

『オムライス…もう冷めてるじゃねえかよバカヤロウ…』

でも、こんなに温かい料理を食べたのは初めてだった。

「あ…譲くん…」

『わりい、起こしちまったか？』

「ゴメン…散らかしちゃって」

『そんなの俺が片付けとくから、寝てて良いぞ？』

「アタシがいつぱい食べるから…仕事いつぱい入れたんでしょ…？  
だから…ちよつとでも役に立とうとしたんだけど…余計迷惑かけち  
やったね…」

『気にすんなって…』

「譲…くん」

『うん？』

「…お疲れ様」

『ああ、愛も…お疲れ様』

## チヨメディー第六話　父が残してくれたモノ・前編

いやあ、前は酷い目にあっただぜ。あれからメルトは三日三晩、熱にうなされていた。

相当あのババアの相手がトラウマになったのだろう。

さて、メルトの体調も治ってきたし、今日は　能力者対策　に魔道具を買いにお買い物だ。

カマルト（大鎌）などは、呪文で　作る　のではなく、　呼び出す　のだ。

譲の破壊能力の巻き添いを喰らったカマルトは、跡形もなく吹っ飛んだので、代わりとなる武器の調達と言う訳だ。

そんな訳で、俺達は魔界の街に来ている。

もっぱらお気にの店はここ、処刑堂。カマルトも処刑道具だからここを買った。

店内に入ると昼なのに真っ暗で数少ない蝋燭の光だけが唯一の明かりとなっている。

「まだまだあー！これからだあー！」

店の奥からいきなり店長の極太い叫び声が聞こえてきた。

きつとまたやってるんだろっなあ…

「特訓開始ー！まずは指立て伏せ！」

「押忍！！」

この店長はかなりのマツチヨマニアだ。  
店員さんも全員マツチヨ。と、ゆうか…マツチヨしか雇わないらしい。

『あの…店長さん？』

「おおメディー！メルト！お前らもマツチヨになりきたのか？」  
違います。

『カマルトが壊されちまってね。代わりの処刑道具を買いに来たん  
だ』

「何！？カマルトが壊されただ！？相手は誰だ！？そいつはマツ  
チヨか！？」

マツチヨから離れる。

「俺が鍛え上げたカマルトが壊されるなんて…まだまだ筋肉が足り  
ないんだー！」

いや、そこは関係ないだろ。

つてか、そろそろ店員さんも辛そうだぞ？



「よし、ちょっと待ってる。お前ら、指立て伏せは終わりだ」

ホッ…やっと仕事してくれるか。

「最後に俺に勝った奴から仕事に戻ってよし」

ゴクリ…と三人の店員が生唾を飲み込む。

「今日の勝負は…竹の子マッチョだ！」

何だそのゲームあー！？

竹の子ニヨッキじゃないのか？

「いくぞ！」

「「「押っ忍！！」」」

「せーの、竹の子竹の子マッチョッチョ！」

「1ニヨキイヤア！！」

「ンん2ニヨキイイイヒヤア！！」

「「3！ニヨキイイ…うっ！」」

「気合いが足りん！」

どうやらルールは竹の子ニヨッキと同じようだ。

1から順に数えていき、他人とかぶらないようにする心理戦ゲーム。

ただ、かなり気合いが空回りし過ぎてニョッキヤアとか言っちゃ  
ってるよ…。

店員A、Bがかぶってしまいアウト。店長から激が飛ぶ。

「貴様らは心を無にできてない！読まれないようにするから駄目な  
んだ！こつちから読め！」

…読まれないようにするんじゃない？

そうか…俺達は読まれないようにする事に気を捕われすぎていた。

心を無にする…か。

あの店長さんも中々役立つ事を言う。

『店長！俺とメルトも混ぜてくれ！』

「メディー！？俺は…」

『もし大樹が漢字を読める様になつたら困るだろ？』

「…かなりな」

『じゃあ心を無にする修業だと思って……な？』

やれやれ…とため息を吐いたメルトだが、仕方なく参戦する。

「竹の子竹の子マッチョッチョ！」×6

.....。

ゲームはスタートしたが、誰もカウントしない。

店員さんはデビルAくらいの魔力を感じたから、かなりの腕だと思う。

こんなくだらないゲームだと思っていたが、心が読まれている。

「くだらないなあ... 一二ヨキ...」

「一二ヨキイヤア！」×4

メルトのカウントと同時に店長と店員三人がカウントを始めた。

『メルト、真剣にやれ』

「こんなゲームをか？くだらねえ」

『バーカ、お前今読まれてたぞ？』

「.....！」

なるほど、皆して修業に付き合ってくれるわけね。

どうやら俺達は気を消し、店長と店員の道連れ攻撃を避けないといけないらしい。

「三回俺と攻撃がかぶったら…マッチョになるまで帰さないよ」

やべ、本気になる。

この店長ゲ　って噂だからな。

もし店長が噂通り、　イだったとしたら…ひい！

メルトもそれを察知したのか、額から汗が垂れる。

前々回ヒドイ目にあつたからね、今回も危ないよ、メルちゃん。

そして二回戦。

またしても硬直状態。

…読まれてる、確実に。

手の動き、口の動き。

身動きが取れない…。

間違いなく俺の動きに合わせてくるだろう。

…どうする…どうする？

……………そうだ！

心を無にするんだ。

目を閉じ、俺の精神と場の空気を融合させるイメージを作る。

全員の呼吸が聞こえてくる。

.....。

（メディーの気配が…消えた？）

今だあー！

『1ニヨキ！』

「！！」×4

.....。

メディー、クリアー。

さらに呆気を取られている隙に間髪入れずメルトが

「2ニヨキ」

メルト、クリアー。

「ガハハ、やられたよ」

店長は手を額に当て、まいったとポーズを取っている。

「これで能力者にも読まれねえな」

『知ってたのか店長？』

「ああ、俺の仕事は鍛冶だぜ？鍛えるのは武器だけじゃなく、お前らみたいなガキもだ」

はは、おかげで良い修業になりましたよ。

「これは選別だ。持ってけ」

店長はカマルトよりも一回り大きいサイズの大鎌をくれた。

『いいのか！？』

「俺の負けだからな。特注品だぞ？」

スゲー魔力が込められてる。それに軽いし握りごたえも抜群に良い。

「魔鎌、ガマルトだ」

『サンキュー店長！』

目的の品も手に入り、満足気に店を後にした。

よし、心を無にする事もできたし、負ける気がしねえぜー！

――――。

「いいんですか？店長。ガマルトをあげちゃって…」

「そうですね！あれは店長が長年掛けて鍛えた名鎌じゃないっすか！」

「ククク、ガマルトはメディーの父親が鍛えてくれと持ってきたもんだったから、元はと言えばアイツの物だ。」

それに…あれが軽いと思うか？」

「…？メディーは軽々と持っていましたか？」

「ガマルトには強力な潜在魔力が込められている。故にマッチョな俺でも持つのがやっとなのさ」

「………ってことは」

「…メディーって奴は」

「…実は超マッチョ？」

違います！メディーの魔力が強すぎると言っ事です。

—————。

「ご機嫌だな、メディー」

『まあな、こんなに魔力を感じる鎌は見た事がねえよ』

ガマルトには凄まじい潜在魔力を感じる。

ここまで凄いと、鎌と言っても狩る以外に別の使い方があるんじゃないか？ と、期待してしまう。

「フオッフオッフオッフ、その君達」

不意に声をかけられ、振り返ってみると白衣を着たオッサンが立っていた。

頭のとっぺんにハゲを作り、サイドの髪は全部白髪。

さらに鼻がでかい。

うん、コイツ博士だ。

『メルト…目を合わすなよ』

「え？あいつ知ってるのか？」

『いや、知らん。ただ、下手したら持ってかれるぞ』

「持ってかれる！？」

「おいおい、君達、何ブツブツ言ってるのさ」

『うるせえ、お茶 水』



「お茶の！？それはどうゆう意味だ！？」

『人間界では有名な博士だよ』

「フオツフオツ、悪くないのう」

どうやらあだ名を気に入ってくれたようだ。  
いやゝ良かった良かった。

「んで、博士が俺達に何の用だ？」

うん、さすがメルト。話進めるのが上手だね。

「フフフ、赤い目の挑戦者を確かめに来たんじゃよ」

ハア…またそういう奴か。

最近は魔界にいる時も皆からの視線が冷たいんだよね。

たまに《コイツらを倒せば俺が赤い目に挑戦できる》なんて考えの馬鹿も現れるし。

ま、そうゆう馬鹿は全部返り討ちにしてやったけど。

「皆に馬鹿にされ悔しいか？」

『そうでもねえよ。俺とメルトならできる』

「今の君らじゃ…無理だね！」

コイツむかつくな。

そろそろぶっ飛ばしていいか？

「アラーム！」

うお、今の言葉が釈に触ったのか、メルトが博士に呪文を唱えた。

「フォッフォッフォッ」

…効いてねえ？

馬鹿な！メルトの呪文が直撃したんだぞ！？

「ただ呪文を唱えればいいってモンじゃないよ、デビルAトップのメルトくん」

「何者だ…アンタ」

「フォッフォッフォッ、通りすがりの博士さ」

『フン…ならこれでどうだ？……ガマルト！』

大鎌ガマルト。

そいつを一振りするが、あっさり博士に避けられた。

ガガガガ…

後ろに飛んだ博士にガマルトの衝撃波が飛ぶ。

「…フォッ！？」

これは予想外だったみたいだな。

何せ、俺自身が予想外だもん、こんなの。

「じゃが、甘いよ」

たった一本、右手を衝撃波に向けるだけで攻撃に耐えた。

いや、衝撃波を…消した？

「フオッフオッフ」

憎たらしく笑う博士の手には小さなドクロ…？

なんだ、あれ？

つてか…何で効かねえんだよ！

「気になるかね？何故効かないのか。…付いてきなさい。君達の魔力を上げてあげよう」

気が付くと俺達は、無意識のうちに博士に付いていった。

—————。

俺達は人通りの少ない道を延々と移動。

木々に囲まれた白い建物。旗から見れば研究ラボとも言える場所に着いた。

「ここがワタシの研究室じゃ。入りなさい」

中に入ると、訳の分からない機械がズラリと並んでいる。

「まず、そのまえに確認したい事がある」

『勿体振らないでとっとしろよ』

「君達のチームワークを見させてもらおう」

そう言つて博士は、俺達の目の前に三つの箱を持ってきた。

箱にはそれぞれ、A、B、Cのアルファベットが書いてある。

「Aの箱には魔力増強に必要な物。Bの箱には強力な魔道具。Cの箱の中身は秘密じゃ」

『…これをどうしろと?』

「相談なしで二人の意見を同時に言ってもらう。例えば、二人共Aと言え、二人の魔力を上げてやろう。ただし、外した場合は駄目の一発勝負じゃ」

くだらねえ心理ゲームか。

「フオツ、さあ選びたまえ」

俺にはガマルトがあるからBという選択肢はない。

…が、メルトはというと、特別強力な魔道具はないわけだ。

パートナーを考えるならBが良いだろう。

いや、しかし魔力を上げてもらうのも悪くない。

個々のステータスが上げれば呪文も使える回数も増える。

そして、謎のCも選んでみたい。

…これ結構難しいな。

「頭脳明晰のメルト。魔力だけのメディー。凸凹コンビのお前らが、クリアーできるかのう?」

…よし、考えるの面倒だ。

「『全部』」

俺とメルトはほぼ同時に答えた。

「…フォッ!」

『はい、俺達の勝ち。さあ、全部もらおうか』

「待て待て!なんじゃお前達は!」

「メディーなら考えるの面倒だと言って、全部って答えそつだからな」

「…なら、メディーは失格じゃ。メルトがパートナーを考えても、お前は自己中心的な考えじゃからのう」

『馬鹿言え。メルトなら、俺の考えに合わせてくれる』と信じてたのさ』

「フオッフオツ！なんて奴らじゃ！」

博士は参ったと言わんばかりに、額をペチーンと叩いた。

「約束は守ろう！さっ、箱を開けてみるがいい」

『やрий  
』

俺は早速Aの、魔力増強の箱に飛び掛かった。

『箱の中身はなんだろう』

パカッと開けてみると、小さいワープホールがあった。…うん、これ吸い込まれるね。

『てめえ御茶 水ざけんなあああ……』

そして、俺とメルトはワープゲートに吸い込まれていくのだった。

## チヨメデイー第六話ゝ父が残してくれたモノ・前編（後書き）

次回へ続きます。リプレイと交互で読み難くなってしまつてゴメンなさい。

## リプレイ第七話　花火大会とアイツ

「にやああああー！！！」

ああゝうぜ。

せっかくの休日にのんびりゴロゴロ昼寝していたって言うのに、愛の馬鹿でかい声で目が覚めちまったぜ。

「譲くーん！」

『なんだよおゝ…悪魔でも来たのか？』

「ド…ドーンって大きな音がしてね！あ…あ…赤い目が空に！」

『ハア！？』

赤い目が空に現れただど！？　神のお告げだとしても言うのか？

『ドコだ！愛！？』

慌ててベランダまで駆けて行き、空を見る。

辺りは暗くなっていた。どうやら昼寝で2時間くらい仮眠とる予定が、かなり寝てしまったみたいだ。

ヒュウウゝ……



ドーン!!

「ほら！また出たあー！しかもイッパイ出たあー！」

うん、花火だコレ。

「早く、大樹君呼んで……ニヤアアアー！緑色の目とか青い目まで出たあー！」

『あのね、愛。アレは花火って言って…その…見て楽しむモノなんだよ』

「バカじゃないの譲君！だって爆発してなくっちゃうんだよ！？きつと私達の目もヒュウウ…ドーンって！イヤアアアアー！！」

よし、とりあえず黙らせよう。

『落ち着け、ほら、メロンでも食べて…』

「メロンなんて食べてる場合じゃないでしょ！そんなの後回しですぐになんとか…後回し…うん、まずはメロン食べよッ」

よし、落ち着いた。

施設の裏庭には畑があつて、メロンも作っているから、いくらでも贈ってくれる親切な人がいるのだ。

ただ、親切の度が過ぎていと言つか…贈られてくる量が、毎年ハ  
ンパではない！

しかも、食べ切つてない内に次！ ほらまた次！ …と、来るので、  
ぶつちやけメロンは見たくありません！

でも食べないと悪いと思つてメロンジュースにしたり、ジャムにし  
てみたり、焼いてみたり煮てみたり。

さすがに後半は失敗だつたが…。

「うん、おいしい！おかわり」

今では全て愛の胃袋に納まるからメツチャ助かっていたりする。

「譲君、いつもメロン食べないね」

うん、だってもう見たくもないしね！

『そうだ、愛。あれは花火。人間はアレを見て楽しむんだよ』

「じゃあ恐くないの…？」

『むしろ見慣れれば綺麗だよ』

「だって音大きくて怖いもん」

『今日は駅近くで花火大会なんだ。行ってみるか?』

「ヤダ! 怖い!」

『屋台で美味しい食べ物イッパイあるぞ』

「讓君! 何してるの!?! 早く行かないとなくなっちゃうよ!」

すでに人間モードの愛。

愛は人間界の食べ物に弱い…と。

—————。

「歩きにくいなあ」

『でも似合ってるぞ』

「ホント!?!」

今日の愛は花火大会と言う事で浴衣になっている。

雑誌を見て瞬時にコピーしたのだ。

「讓君も似合ってるよ」

ちなみに俺はジンベエだ。

今日ばかりは戦いの事を忘れて、純粹に花火を楽しむとするか。

「からあげだあゝ！」

…アイツは常に忘れてる気がするけど…まあイイか。

愛だって戦闘モードになれば人が変わった様に目付きも恐くなるし…

「おじさん、暑いのに大変だねえ」

「オッ、こりや可愛いお嬢さんだ。ほら、からあげ一個おまけだ！」  
「ありがとおゝ」

うん、愛だってホントに変わるんだよ。

しかしこの花火大会は、日本で五本指に入るほど有名であるため、会場に訪れる人もごった返っている。

ぼーっとしていたらすぐにはぐれちゃうからな。  
気をつけないと…

あれ？ 愛がいない。

うん、早速迷子か。

『マジかあー！愛ー！ドコ行つたあー！？』

必死で探してみるものの、人が多すぎて思う様に前に進めない。

ドコを見ても人！ 人！ 人！！

マジ群れすぎなんだよチクシヨオ！

愛はピンクの浴衣を着てるけど…ピンクなんて女の子に人気な色、他にもいっぱいいるしなあ…。

しかし、ホント色んな人がいるね。

親子仲良く来ている人達。單車ころがしてコール切ってる若いお兄さん。

気合い入ってメイクしてるお姉さん。  
赤い目の女の子。

……うん、おかしいね。

『こんな大勢の人前で能力使うなあゝ！』

「あ、讓君。ダメだよ、迷子になっちゃ」

『それはお前だ。どうせ一人で屋台突っ走ってたんだろ』

「エヘヘ」

『あと、それからね。早くこの人達のシールドを解除してあげなさい』

愛にナンパ 愛は屋台に夢中 お兄さん傷付く 無理矢理 愛キレる シールド。

どうせこんな所だろ。

シールドは完全密封状態だから、長時間閉じ込められると息苦しいんだよね。

本来は防御に使うシールドを攻撃に使うとは…。

ね？ 戦闘モードに入った愛は怖いんですよ。

「花火見づらいよぉ」

『じゃあ近くに良い場所あるから、そこ行くか…』

「行こ行こぉ」

なにせ、まだ会場に着いてすらいないからな。ここじゃ落ち着く事もできない。

「もうはぐれちゃダメだよぉ」

『だから、それは愛だっ…』

「…ん？どうしたの？」

『いや…別に』

「フフッ、じゃあ行こっ」

いや、何このシチュエーション。

周りはカップルで来てる人も多い。

俺達だってそう思われてるかも…。

手え…繋がれた。

俺達は今、人前を手え繋いで歩いている。

そっぴや俺、今まで彼女とか作つた事なかつたな。

――――

ようやく会場に到着。

でも俺は人ゴミが嫌いなので、ちよつと離れた所から見ている。

「すこーい！超良く見えるうー！」

さつきまで花火を恐がつていた愛も現金なもんだな。

まあ、この場所は俺のベストスポットだ。

高い所だから全ての見通しが抜群に良い。

「引きこもり君だつたくせに、良くこんな所知つてるね」

『うるせえ。引きこもる前は、ココで良く遊んだもんだよ』

遊んだ…と言うより喧嘩か。

まあ、俺達にとっての喧嘩は遊びだったとも言つが。

なあ…リョータ。

リョータ…小学三年生の時の親友。

結局リョータは、俺に一言も挨拶しねえで転校しやがったけどな。

「譲く…ん？もしかして泣いてん…」

「汗だよ！今日は暑いからな！かき氷でも買ってくるよ。ちょっとココ動くなよ」

バカか俺は？ 何いまさら思い出して泣いてんの？

「おっちゃん、かき氷一つ！」

「はいよ！シロップは好きなの好きなだけかけて良いよ！」

レモン、イチゴ、ブルーハワイなど定番なシロップが並ぶ中。

…なぜか俺は嫌いなはずのメロンシロップを選んでいた。

「お待たせ、ホラ」

「わあ メロンだあ … フフツ優しいね、譲君」

「だろ？」

「ふうん、こんな所にこんな場所があるなんて、リョータやるじゃん」



「最近舞に構ってやれなか…」

「『……………あ』」

『…リョータ？』

「……………譲？」

しかし変わらないってわけじゃないが、昔の雰囲気で一瞬で分かった。

コイツはリョータ。

俺の親友。

そっか…この花火大会は日本五本指に入るで有名だもんな。

昔も…花火大会中もココで喧嘩してたっけ。

『急に消えやがって…女連れで登場か？ナメてるねえ』

「それはお互いさ……………」

ん？ リョータが愛の事見て固まってる？

さらにリョータの彼女も…愛を凄いい形相で睨んでいる。

「てめえ……………」

なんだよオイ、リョータ達から思わずビビッちまう程の怒りのオーラが出ている。

それは全て、愛に向けられたものだった。

「てめえが明を連れてったんだろ！！！」

「何て事すんのよアンタ！！明を返してよ！！！」

怒りのオーラ…それは悲しみへと変わり、二人共泣いている。

『オイ…リョータ、何言って…』

「譲は黙ってる！」

『…あ？』

楽しいはずだった花火大会。それは思い出の場所に來た事により、親友との偶然の再会を果たした。

しかし、それは歡喜の再会ではなく、修羅場との再会でもあった。

「メディー…明は悪魔よ」

「ザケんなあ！明は人間だ！」

メディー…明…。

そうか、リョータと彼女はメディーの人間時代の頃の友達…いや、親友か。

そして、愛がメディーを魔界に連れ戻したんだっとな。

それでリョータ達は、愛を怨んでいるのか。  
親友と強制的に別れさせた愛を…。

「明は翼も角もある。呪文だって使うし、今は私や讓君の命を狙ってるわ」

「嘘付け！明は人殺しするような奴じゃない！」

『リョータ、愛の言っている事は本当だ。メ…明は悪魔だ』

「俺の親友を悪魔呼ばわりすんじゃない！」

リョータはガキの頃はクールな奴だった。人を挑発した態度で喧嘩こそしたものの、今みたいに見境なくキレたりする奴ではない。

あれから9年経っているため、リョータの全てが変わったかもしれないし、9年前の親友より、1年前までの親友の方が大切なものも分かる。

だが…

「」のッ」

もう喧嘩の腕は…格が違うんだよ…。

『辞めろリョータ。お前のパンチは俺には当たらない』

「くそ…なんでこんなに強くなつて…」

悪魔を相手に命懸けで戦い、人間離れた能力と、それを使いこなす精神力と修業。

生身のリョータが俺に勝てる訳がない。

『愛、無関係の人間に能力を使ったら…神様に怒られるか？』

「フンッ！神様はアタシを天界から追い出したのよ！？そんな掟、関係ないわね！」

まあ愛は一般の人間に能力使ってたしな。

『じゃあ…ー能力発動。破壊能力！』

右手をかざし、威力をコントロールする。

くドバーン！く

激しい音と共に、リョータの真後ろの木が木っ端みじんに弾け飛んだ。

「コントロールできてるわね。お見事！」

「…な？…譲…？お前……………」

もちろん能力でリョータを攻撃しようなんて気はサラサラないさ。

ただの威嚇。話を聞いてもらいたいだけ。

『分かっただろ？俺のこの能力を欲しがった閻魔の使いで、明は俺を殺しに来ている』

「誤解しないでね。明を魔界に連れて行かなかったら、人間界は混乱していたでしょ？それは天界にも悪影響を及ぼすの」

リョータと彼女は黙り込んでいる。

そして力なく座り込んでしまった。

「ハハ…何だよ…。譲も…明も…急に遠いところ行っちゃってさ…俺は置いてけぼりだよ」

『明は悪魔だが、俺は人間だ。まあ、この能力は人間離れしてるけどな』

本当は…リョータにこんな事しなくなかったけど、仕方ないよな。

それに、ちゃんと知ってるんだ。

リョータはクールな奴だから、親友にだって涙を見せたくない奴だつて事も。

だから俺と別れる時だって、一言も声かけてくれなかったんだろ？

そんなリョータが、明を失い、辛かっただろうな。

「譲は明を殺すのか…？」

『むろん、そのつもりだ』

「頼む…殺さないでくれ」

『そしたら俺が殺される。リョータ、明は戻って来ない。できる事なら、俺達をもう忘れてくれ』

「ウウ…」

初めてリョータの涙を見た俺は、無意識の内にリョータの肩に手を置き、なぐさめてやった。

「私ったら、何も知らないくせに…ゴメンなさい…ゴメンなさい」  
「いいの、気にしないで」

さっきの暴言を必死に謝るリョータの彼女を愛は強く抱きしめた。

二人の泣き声を掻き消す様に、綺麗な花火が夜空に上がっていた。

## リブレイ第七話　花火大会とアイツ（後書き）

はい、作者のタンポポです。いやあ、譲君の過去の親友で、あやふやだった奴はなんと、チヨメ<sup>メデー</sup>に出てきたリョータくんでした。明の喧嘩友達として活躍。クールな性格だが、明と絡むと崩れる。親友が親友を殺す時…何もできない自分。今後もしョータの登場がありそうな気がします。

## チヨメディー第七話　父が残してくれたモノ・後編

『いたた…』

「大丈夫か？メディー？」

『ああ、なんとか』

前回ワープゲートに吸い込まれた俺達。

どうやら御茶ノ　博士君は俺達を裏切ってくれたようだ。

改めて辺りを見回してみると、何もない。

本当に何もないのだ。

真っ白な空間。地面すらも同色と化していて、なんか気持ち悪い…。

どこまでも果てしなく続く空白の世界に、俺とメルトだけがポツンと浮いている。

「フオッフオオ！」

そして上から聞こえる、このクソムカつく笑い方は…

『てめえ！ティーのウォーター！』

「ティーのウォーター！？」

『早く出せや！何のつもりだよ！？』



「何って…箱の中身を手に入れる為の試験じゃよ」

『試験はさっき合格しただろうが!』

「馬鹿モン。あれは何の試験を受けるかのテストじゃ。これからが本番」

大人は汚ねえや。

いつも僕達ピュアな子供達の心を弄ぶんだ。

ほら、お前の好きなゼリー買ってきたぞ　わあ！　パパ、ありがとう……って、これイチゴ味じゃん！　僕はレモン味のゼリーが好きなのに！　パパの馬鹿あ！

ってな感じで大人は子供に甘い誘いをした後狩るのさ。

「Aの試験、魔力一点集中」

博士の声と同時に、目の前には馬鹿でかい門が現れた。

中心にはドクロの不気味なデザインが入っている悪趣味な門だ。

『あ！あのドクロはさっき博士が持ってた奴じゃん!』

「そのドクロに呪文をぶつけるのじゃ。ある威力に達すると門は開き、クリアーとなる」

用は俺達の魔力を試してるんだろ？

『久しぶりに俺が行くぜ!』

周りは空白の世界。精神を集中させるには持つてこいの場所だ。

『ガマルト！』

名鎌ガマルト。ただ振るうだけでも衝撃波が飛ぶのが分かった今、もはや恐いモノなしだ！

『うらあ！』

野球のバットの様に思いつきりスイングしたガマルトからは、さっきより凄い衝撃波が発生した。…しかし、それがドクロに吸い込まれていく…喰われた！？

『なんだよコレ！？』

「アラムラデーー！」

寒波いれず、メルト十八番の爆発系最強呪文。

が、それも同じくドクロに喰われてしまった。

「…チッ」

そっか、博士はさっきもこうやって呪文を消したんだな。

おいおい、メルトでも駄目となるとお手上げですよ。

出られねえじゃん！

「フオツフオツ！まだまだ甘いのう」

『おい、ティーのウォーター!』

「何かね、判断力赤点のメディー君」

『ヒントくれ!』

「フオツフオツ、泣き寝入りかね? 残念じゃが、魔力を一点に集中すれば呪文の威力も上がるじやろつ、などと教えるわけにもいかんぞい?」

『クソ! なんてこった! じゃあもう完全にお手上げじゃねえか! まさか呪文を一点に集中すれば良かったなんて思い尽くはずもないなるほどおお!!!』

「しまったあ!!」

呪文を一点集中か。そついや試験のタイトルがそうだったな。

『メルト』

「ああ」

『俺はガマルトに魔力を込めてみる!』

「俺は魔力を上げつつ爆発の範囲を狭くし、呪文の効力を圧縮する!」

『ガマルト!!』

「アラームラディー！」

衝撃波と爆発が同時にドクロに直撃。

また呪文を喰らったドクロだったが、威力に堪えられず、破壊！

門が開いた！

「フオツフオツ、お見事！メルト君。呪文：特に爆発系の呪文の弱点は、範囲の広さから威力が分散してしまう事じゃった。

範囲を狭めたのに同じ魔力を込める事で威力が上がるのじゃが、まさかイメージしただけで一瞬でマスターしてしまうとは：やはり天才じゃの

メディーも、ガマルトをただ振ってるだけじゃ宝の持ち腐れじゃ。武器にも魔力を込めてなんぼじゃからのう」

『そんな御託は良いからさ！早く魔力増強アイテムくれよ！』

「ないわい、そんなもん」

『ホワイ？ティーウォーター？マタダマシタネ…？』

「じゃが、お前らの呪文は強力になったじゃろ？」

大人は汚ねえや。

「そう落ち込むなメディー。博士に鍛えてもらったと思えば良い」

「フォッフォッ、さすがはメルト君。話が分かる。マルトにそっくりじゃ」

「父上を知っているのですか!？」

「マルトを鍛えたのはワシじゃからな!…もちろん、マディーもじやよ。あいつらも昔はお前達みたくコンビを組んどった」

ハハハ、親子揃ってお世話になったってことか。

親父もこうやって強くなったんだなあ。

「Bの試練はもうやる必要もないじやろう。メディーのガマルトに敵う武器もそうない。何せマディーの相棒だった武器じゃからのう」

『え!？コレって親父のだったの?』

「そうじゃ。鍛冶屋にガマルトを取りに行ったんじやが、店長がメディーに渡したと聞いてのう。息子も見てみたかったし、こうして修業してやったわけじゃ」

一度ガマルトの威力を体感している博士には分かったのだろう。

…今更だけど、俺そんなスゲーもん持ってたんだなあ。

『じゃあさ!Cの謎の箱って何だったの!?』

「それじゃが…メルト、お前にはコレをやるう」

博士は黒光りしたピアスをメルトに渡した。

コレは…犬？ …なんて可愛いモンじゃないな。

邪悪な笑みを浮かべた悪魔デザイン入り。

「ケルベロスのピアスじゃ。試しに使ってみな？」

メルトはこの場で耳にピアス穴を開け、ケルベロスのピアスを付けた。

「この箱の中身…それは召喚獣じゃ。メルト、ピアスに魔力を込めてみるがよい。…ちなみにマルトが昔付けていたものじゃ」

「父上が…」

言われるがままに、メルトはピアスに魔力を込めていく。

「解き放て…悪魔の番犬、ケルベロス」

そして魔力を放出。

すると、目の前には体長は軽く4メートルを越え、頭が三つある、凶暴そうな黒い犬が現れた。

「マルト…様？」

喋った！？

犬なのに喋ったよコイツ。

「マルトは父だ。俺はメルト。今日からお前の主人だ。ヨロシクな」

「…ガッテン！」

ガッテン言った！？

ってか真面目な流れで来てるんだからムリにコメディー入れないで  
良いから！

「黙れやマディー！今日こそ決着つけんぞ！」

『俺はメディーだ！』

つか親父もケルベロスと仲悪かったんかい！

「召喚獣は主人以外には懐かないからのう」

ケツ、良い喧嘩相手ができて良かったよ！

『博士は最初っから俺達を鍛えてくれるつもりだったのか？』

「フオツフオツ、そうじゃよ？」

『じゃあ、もし…最初の箱選択で不合格だったら…？』

「まあ、奴らの息子に限って、それはないと信じとったよ。じゃが  
…もしもの場合、その時でも鍛えてたかものう」

なあんだ。久しぶりにマジになっちゃったじゃんよ。

ま、必死になつて頑張つたから価値はあるって事にしとこ、うん。

「ちなみに、奴らも同じく全部って答えたぞい？お前らと顔も性格も良く似てるわい」

俺と親父が似てる…？

まあ、ケルベロスが主人を見間違えるくらいだからな。

なんか…嬉しいなあ。

…親父も俺と同じ歳の頃、マルトさんと博士に鍛えてもらった。

そして時が流れ、今はその子供、つまり俺とマルトが鍛えてもらった。

何か運命的な物を感じるな。

形見となつてしまつたが、俺には親父が残したガマルトが。

メルトにはケルベロスが。

いつか…俺達は立派なサターンとなります。

どうか、見守っていて下さい。



チヨメディー第七話、父が残してくれたモノ・後編（後書き）

更新遅れました…。本当はこんなにコメディーをやるはずじゃなかったのに…（笑）  
最強

武器を手に入れたメディー、召喚獣が使える用になったメルト。能力がコントロールできるようになった譲に、新技を編み出した大樹。成長した彼らに戦闘が近付いてきましたよ！大樹の新技も、戦闘結果も既に頭の中でイメージできてます。後は書くだけ！メディー達のリベンジなるか！？

## リプレイ第八話　ゲームでポン

くピカ！……ゴロゴロ……

「ヒヤア！」

まだ夕方なのに、どうも外が暗いと思ったら雷が鳴ってるのか…。

愛は脅えて布団を纏って震えてるし…。

『愛、そんなに怖がらなくても電気使わなければ大丈夫だよ』

「カスみてえな事言わないでよ！雷様　らいさま　が怒ってるんだよ？今頃天界は…ヒイイ」

カスって言われた…。ちょっとショック。

つてか雷様つて…なんか良くアニメとかで背中に太鼓みたいなのがあつてチリチリパーマの鬼を想像してしまう。

「雷様は普段は優しいから、怒ると走りながら怒鳴るの…。神様でもキレてる時の雷様には関わらない様にしてるわ」

雷様こええ…！

『つて事は、一緒に降ってる雨は雷様の汗か涙かな？』

「海へ流れ込んだ川の水が太陽の熱で温められて、それが集まって雲になり、雲が冷えるとまた水に戻り地面に落ちる。これが雨です。

あまりカスみてえな事言わないで下さい」

うぜえ！ 雷様が居るって言ったからロマンチックに合わせただけなのに何この言われ方？

『今日おかずナシな』

「それだけは勘弁して下さい」

いやあ… つかどっちにしても雷が止まない事には買い出しも行けないんだけどね。

そもそも愛が買ってきた食材を毎日一つ残らず料理しろってうるさいから常に材料の在庫がないんだよなあ。

まあそれで料理しちゃう俺が悪いんだけどさあ。

『後二時間もすれば止むだろ。そしたら買い出し行くから、それまでおとなしくしてなさい』

「はあゝい。じゃあゲームでもやろつと」

いそいそとテレビにアダプタを差し込み準備する愛。

… っ、待て待て。俺ん家にゲーム機なんてないぞ？

《さそりがため》

始まった！ つかタイトルおかしい！！

――舞台は昭和。ある一人のミュージシャンの、たった一言から全ては始まった……。

「ああー！さそりがためしてえ！！」

それが彼の最期の言葉となったのでした…。

FIN――

…終わったあー！　なんだこのクソゲーは！

「うんうん、私もラストライブで聞いたさそりがためには思わず涙しちゃったもんねえ…」

いやウゼエよ。

『ってかこのソフトと本体はどうしたんだよ！？』

「買ってもらったんだよー大樹君に。また『そろつと』って言うやつで能力使った事を譲君への口止め料として……………あ、言っちゃった」

ふーん、また大樹がねえ。アイツ能力なめてんな、確実に。

『ハア…他にソフトないの？』

「う…ん？あ、コレが合った。二人でできるよ！」

ハイ、とコントローラーを渡されたので反射的に受け取ってしまった。

『ちよっ…俺ゲームとか苦手なんだって！』

そう、俺がゲーム機を持っていない最大の理由がこれだ。

単純にヘタクソなのである。RPGなど長つたらしいのはゴメンだし、格闘系もコンピュータに勝てず、しかもすぐ飽きる。

「大丈夫。恋愛系の心理ゲームだから」

一番苦手なジャンルですな。

『二人用なのにか？』

「そつだよ。まずアタシが質問事項を考えて、状況に応じた解答を譲君がするシミュレーションゲームだよ」

まあ…用は愛の考えてる事を当てればいいんでしょ？

「じゃあ質問に答えるから、ちよっと見ないでね」

そう言つて後ろを向かされてしまい、テレビ画面が全く見えない体制になった。

カタカタと軽快なボタンさばきが聞こえ、途中フフ…など、不気味

な笑い声が聞こえてきた。…コイツ、ロクな質問入れてないな。

「はい、できた！もう良いよ」

画面を振り返ると、バーチャルで作られた二人の男女が現れた。

男の方は目が隠れる長さの黒髪に、てっぺんがツンツンと立ち、鋭い目付きに無愛想な表情を浮かべている。

……うん、コレ俺だ。

「似てるでしょ？」

どうだ！　と言わんばかりに自信満々の愛。

キャラ作成中は俺の顔を見てないのに、良く俺の特徴を掴んでいる。  
…なんか嬉しかったり。

ちなみに、愛と再会した時は短髪だったが、もう伸びてしまった。  
長年の間、長かったから、前髪が短いとどうも落ち着かないのだ。

『そっくりだよ』

「私のもでしょ？」

艶やかな緑色の髪はクセがなく、髪と同じく緑色の瞳はクリッと  
して、白い肌にナチュラルメイク。

愛にそっくりだ。

『お前すごいな。たくさんある中から良くピンポイントで選べたもんだ』

さすがにこれには感心してしまった。しかし、今時のゲームも凄いいもんだなあ。

「そつくりだったら、ココを押してね」

画面には、《似てる》《似てない》の二沢が現れた。

愛に言われた通り、俺はためらわず《似てる》を選択。

ピローンと効果音と共に画面右下の、五個ある空ハートの内、一個目がピンク色に染まった。

なるほど、どうやらこのハートは二人の好感度であるらしく、愛と俺の気が合う選択をすれば良いらしい。

これならゲーム音痴の俺にもできそうだな。

ユズル『どこか出掛けよっか』

アイ

「うん。私行きたい所があるんだ!」

ユズル『前言つてた所だな?…確か……え〜と…』

《彼女がやりたい事は？》

A・ボーリング

B・ビリヤード

C・テラマックに挑戦

三つの選択肢が出てきた。

あゝ…ぜってえコレだ。

『し…C…かな？』

カーソルを合わせてポチッとボタンを押すと、またピローンと言う音が鳴り、ハートが二個に増えた。

「さっすが讓君！買い出しが楽しみだわ」

この後行く気だあゝ…。

ユズル『今日はマツキュでテラマック挑戦の日だったな』

アイ

「そうだよ。そのためにオヤツ抜いてきたんだから！」

二人が笑顔になり画面が切り替わり、背景はマツキュになった。

店員

「いらっしやいませ。ご注文はお決まりですか？」



ユズル『テラマツクに挑戦します』

店員

「かしこまりました。何個でしょうか？」

《テラマツクは何個？》

A・二個

B・三個

C・もおあるだけちょうどい！

おかしいおかしい！

何で一個って選択肢がないの？

これは…愛のノリ的に…

ユズル『あるだけ下さい』

店員

「お客様、お会計が足りない様ですが…？」

アイ

「まあ見栄張らないでよ。恥ずかしいわ、プンプン」

《彼女の機嫌を損ねてしまいました》

デレレ〜ン…と、ハートの半分が減少。どうやら選択肢を間違えた様だ。

「いくら私でもそんなに食べないよ。正解は、二個！讓君と二人で挑戦しようと思ったのに…」

『わ…わりい』

これ正解すれば良いけど間違えると結構雰囲気気まずくなるなあ。

まあ、愛を知っておく良いチャンスかもしれない。

アイ

「ふう…楽勝だったね」

ユズル『そ…そうだな』

アイ

「さ、晩御飯の買い出し行こうか！今日のメニューは何？」

ユズル『今日はアイの好きな…』

《彼女が喜ぶメニューは？》

A・おかずナシ

B・外食

C・霜降牛肉のワイン煮にデザートにはメロンのタルトだよ

…この野郎。

「さあて、今夜のおかずは何かな？」

『それは現実<sup>リアル</sup>な質問かな？』

「ううん、ゲームの中だよ」

『じゃあ……ここで…』

「やりい！今日はご馳走だね」

……この野郎

テロリロリンと、一気にハートが増え、現在三つ目が染まっている。残り二個、早く終わらせなくては破産するぜ。

ユズル『でも手持ちがないから、銀行でお金下ろしてくるね』

アイ

「うん、わかった」

《口座の暗証番号は？》

『ふざけんなあ！！』

「早く早くう」

『早くとかじゃねえから！お前パクる気だろ！』

「…テヘ ……ダメ？」

当たり前だろこの野郎

この質問はスキップだスキップだ。

《次が最後です》

おお、助かったあゝ！

《すっかり日も落ち、辺りも暗くなりました。そろそろ帰らなくてはなりません。公園のベンチに腰掛け、今日の事を話していると、そつと彼氏が手を握り、真面目な表情になりました。》

アイ

「ユズルくん…？どうしたの、急にあらたまって」

ユズル

「アイ……」

《デートの締め、一言甘い言葉を入力して下さい》

…だからふざけんなあ！

「早く早くう！私見ないから」

クルツとテレビに背中を向ける愛。

いや…でも…ねえ？

さっきまでの流れからしてゲームの内容を現実には捕えやがるし、かと言って…いやいや！　だって愛はエン・リユーファ、天使ですぜ？

一緒に暮らしてるが、何より俺は人との関わりを避けてきた罰として、女の子との会話がどうも苦手だ…。

学校のクラスでだって男友達としか話さない。

愛とは普通に話しているが、それはコイツが《天使》だからだ。姿形は同じものの《人間》ではない。

ただ、蘇る…。花火大会での、あの変な気持ち。

手を繋がれた時の…。今まで感じた事のない、あの変な気持ちだ。

現に、もし今、愛が天界に帰られては…俺は…。

おぼつかない手付きで、セリフを入力していく。

ユズル『オレは』

これは俺の素直な気持ちだ。

ユズル『オレはアイと』

一文字一文字打つ度に、意味が分からない程緊張しているのが自分でもよく分かる。

ユズル『オレはアイと出会えて』

隣で愛が楽しそうに、ワクワクしながら笑っているのが見えた。

ユズル『オレはアイと出会えて……………』

『できた。見て…良いぞ?』

「う…うん!」

バツと勢い良く振り返る愛。

しかし、その時…

くプツンく

……………。

「『はて?』」

一気に黒くなるテレビ画面。そして電気も消え、薄暗くなった部屋の中。

『ああ、そついや雷鳴つてたんだ。ブレーカー落ちたなコリヤ』

「ええゝ!?なんでこのタイミングで!?もぉゝ雷様の馬鹿あゝ!  
!神様の意地悪ゝ!!!!」

これは…もしや神様が人間と天使がくつつく事は許さないと言つ意味ですか?

それとも、ただの偶然か…。

「譲くん!何て入れたの?口で直接言つて!せえーの!」

『愛の大食いは食費に響きます』

「ウソだあー!そんなのヤダアー!本当は?さんハイ!」

『言わない…つてか言えない』

「もぉ…こうなったらゲーム通りの展開を再現して最後に特訓した公園行つて同じシュチュレーションで…」

『それでも言わない』

「シールド!さあ、言つまで出さない…」



『破壊能力』

「いとも簡単に壊された…能力使っなって自分で言ったくせにー！」

『それはお互い様』

「ああゝ気になるうゝ！」

俺は愛と出会えて本当に良かったよ。できる限り…ずっと、このまま…。

## チヨメデー第八話　こいつをファイナルラウンドにしようぜ

『ふあゝ…眠ぽ』

おはよう、諸君。今日は珍しくメルトに起こされる前に自分から起きた。

と、言うのも今日は重大な日だからだ。

まるで小学生が遠足に行く前日の夜の様に、緊張してなかなか眠れなかったのだ。

ただ一つ違う所と言えば、『楽しみ』ではない。

それもそのはず。下手したら死ぬかもしれないからだ。

「珍しく早起きだな、メデー。準備出来次第行くぞ」

『了解…』

今日がおそらく譲達との最後の決戦となるからだ。

博士の元で修業を積みパワーアップした俺達だったが、気が付けば閻魔様に依頼を受けて60日が経過した。

赤い目の剥奪に与えられた期間は今日で最後。

これで駄目なら俺達に力がなかったと諦めて大人しく罰を受けるさ。

『行こうか、メルト』

「ああ、死ぬなよ」

『それはお互い様』

いざ、人間界へ…。

ワープを済ませた俺達は上空に浮いている。

譲達の姿も見える。すでに奴らの行動はお見通しだからだ。

『不意打ちつてのは好きじゃねえからな。正々堂々と行きますか』

「不意打ちも何も愛に気配読まれてるから無駄だったの」

…それもそうだな。

あゝあ。人間のままだったら…命懸けで戦闘なんかしないで皆と楽しく平和な日々を過ごせてたってのに…。

『全く…恨むぜ』

「ふっ…誰をだよ」

『しいて言うなら…こんな設定を組んだ奴かな!』

「生きて帰れたら…地球上のタンポポ踏み潰す旅に出るか?」

『……悪かねえ』

メルトと拳をコツンとぶつけた後、俺達は譲達の前に降りた。

「待つてたわよ」

愛…もとい、エン・リユーファが腕を組んで言った。

じゃあ、行きますか。これがラストバトルだ！

「メディー！俺にまかせろ！」

その隙にメルトが攻撃に移る。

「召喚…ケルベロス！」

メルトが呪文を唱えると、魔法陣から現れた、三つの首を持つバカでかい犬。

博士からもらったマルトさんの形見だ。

「行け、ケルベロス」

メルトが指示すると、人間に牙を向け勢い良く飛び掛かった。

「シールド！」

リユーファがシールドを半球に張る。

しかし、ケルベロスの牙はシールドの強度を上回り、いとも簡単にシールドを破壊した。

「さすが父上の下部だ…続けていけ！」

初の実戦にも関わらず息ピッタリのメルトとケルベロス。

こちらの有利は変わらない。

「ヤバイ…召喚、ユニコーン！」

今度はリユーファが呪文を唱えると、一本角が生えた馬が現れた。

その大きさは、ケルベロスをも軽く越えていた。

「みんなを守って、ユニコーン！」

ケルベロス対ユニコーン。

なんかコメディー離れしてきましたね。

体制は若干ケルベロスが圧されている。

「うーん…やっぱりケルベロスがユニコーンに勝つのは無理か…」

『いや、冷静すぎるだろ！なんとかしろよ』

「分かってるよ。ケルベロス！」

メルトの声を聞いたケルベロスは、ユニコーンから手を引く。

「ケガさせてゴメンな。よくやった」

そしてケルベロスは、魔法陣の中に消えて行った。

「コイツを試してみるか…ガーゴイル!!」

メルトはネックレスを掲げ、それに魔力を込めた。

ホストでバイト中にババアからもらったインチキ悪徳商業の召喚デ  
ター!

本気にするなよメルト、そんなもん嘘に決まって…

「グオオオー」

ホントに召喚したー!

「なんだよあれ!？」

これには譲も驚くだろうな…。

体調五メートルはある化け物だ。全身銀色で紫色の瞳は目が合った  
けで恐怖心を植え付けられる。

二つの鼻の穴には輪っかが貫通しており、鋭い牙は岩をも砕きそう  
だ。

「ガアアアー!!」

身震いしそうな雄叫びと共に、口から衝撃波を繰り出した。

「マジ?...ユニコーン!!」

ユニコーンの体から円形のシールドが張られる。  
しかし、それごと粉碎したガーゴイルの衝撃波。

すごすぎる…。

「破壊能力!!」

譲の手がガーゴイルに向けられた。いくら強力な破壊能力だとしてもガーゴイルを破壊することは…

くガキンく

ガーゴイルの鼻の輪っかが破壊された…？

「グオオオオ！」

よく分からないがガーゴイルが苦しんでるみたいだ。

「やっぱり魔力の源は鼻の輪っかね」

…ちっ、リユーファには召喚獣の情報は筒抜けって事かよ。

『こうなりや接近戦だ。行くぞ、メルト!』

「ああ、まずはこの前と同じやり方だ」

素早い動きで人間を翻弄。そして刹那の如く譲の両脇へ。

しかし、俺達が挟み打ちをするポイント。そこをベストタイミング

でドンピシャリで手を構える譲。

「…ビンゴ！」

読まれてる…大樹か…！

「能力発動！」

破壊能力。

しかも両手から俺とメルトの二方向に！？

まず…

『ぐわああ』

「チツ…」

とっさに防御を唱えた俺とメルトだったが、かなり後方に吹き飛ばされた。

「やっぱり力を分散すると威力も減るな…」

それで死なずにすんだか。しかし、かなりのダメージを負ってしまった。

しかも、動きが読まれている。

「…大樹か」

『おそらく…な』



やばいねコリヤ。

大樹に読まれてんじゃん。

「別れるぞ。俺は譲を殺る。メディーは大樹を頼む」

『OK!』

大樹の看破能力…見事な物だ。勉強した甲斐もあつて、完全に思考が読まれている。

まあ、メルトは色々考えるから、大樹とは俺が戦った方が良いな。

俺の戦い方は、そんな戦略なんてねえ。

とにかく突っ込むのみだ。判断力赤点野郎なんでね！

『くらええ！コルト!』

まだ大樹に見せていない呪文、コルト。

運気を大幅に欠落させる呪文だが、そんなもんは囿にすぎない。

呪文の効果を読まれるなら、接近戦だ。

所詮人間が悪魔の潜在能力に敵わないってことよ！

「ふーん…」

あれ？

コルトが全体的外れの所に？  
大樹の奴、もう避けたのか！？

『くそ…』

接近戦。

これはもう呪文など関係なしに、人間とのタイマンだ。

俺のパンチはメルトですら避けられない程のスピードだ。

そう、あのメルトですら…

俺のパンチは避けられない

なのに、なぜ！  
人間なんか避けられる？

「遅いね」

余裕の表情ニヤリと笑う大樹。

『11のッ』

素早く繰り出した右ストレートは、いとも簡単に避けられてしまう。

…今のは何か変だったぞ？

『もう一発だ！』

そしてまた避けられ…

いや、これは避けられたと言うよりも…。

俺が攻撃に移る前から、すでに大樹は避けている。

「《先読み》って知ってる？」

…先読み？

「君の思考どころか、これからする事も読めるって事だよ」

攻撃が当たらねえ…。

「あとね…もつと読まれたら困るのあるでしょ？」

ちくしょう…人間なんか…

「もちろん、君の弱点も読めてるよ」

ハッ、と我に返った時、大樹の拳が首の根本を直撃していた…。

「僕達は普通の人間じゃないよ。能力者だって、潜在能力は人間離れしてるんだ」

「メディー、これを首に下げとけ」

『閻魔様？これは？？』

「魔后石のネックレス。決して碎ける事はない」

『はあ…なぜ俺に？』

「未熟児は首が弱くてのう。ま、魔后石が首を守ってくれるのじゃ」  
『ありがとうございます』

—————

そっか…魔后石のネックレスは譲の破壊能力で壊されたんだっけ…。

沢田大樹。やるじゃん。

看破能力だけでなく、先読みの能力まで付けていたとは…。

コイツもまた、天才。

だから言っただよ…。人間のままで良かったのに…。

……………ちくしょお。

「メディー！」

「お前の相手は俺だ！破壊能力！」

「しまっ…」

破壊能力の衝撃をモロに受けてしまったメルト。

遙か後方まで飛ばされ、血だらけで倒れてしまった。  
なんとか立ち上がったメルトだったが、翼はもげ、疲労困憊。立っているのがやっとである。

俺はなんとか立ち上がり、メルトと元へ向かった。

体中が痺れている。ダメージは相当なものだ。もう強力な呪文は使えそうにない。

『どうする、メルト…』  
「…関係ない」

今のメルトは相当キレている。  
下手すりゃ死人が出るぞ？

「読まれたって構わない。用は避けられなきゃ良いだけの話しだ」

…出る。メルトの呪文が。

「あのババアには本当に感謝だぜ。避けられるなら、避けられない呪文を唱えるまでだ」

メルトが呪文を唱えると、人間達の足元に氷が張られた。見事な氷像は足首にまで侵食され、身動きが取れなくなっていた。

『考えたな、メルト！』

「腕でガッチリ抱き抱えられてキスされ続けてりゃ、こんな事も思いつくさ」

ああ、ホストの時だね。

なるほど、そんな辛い過去があったのね。

「破壊能力！」

譲のパワーを抑えた能力で三人の氷だけが砕かれた。奴もかなり力をコントロールできるようになっている。

「…遅い」

次の瞬間には、メルトの手から、無数の黒い矢が降り注いだ。

威力はないが、この数はとても避けられない。

この数には破壊能力も対応しきれないだろう。

「…くっ」

ナイフの切れ味とまではいかないが、生身の人間の体では、かなり効いているようだ。

「早く回復を！」

まずい、天使にはたいして効いていないみたいだ。  
ここまできて回復されては…

「あの天使は回復呪文を唱える五秒間、身動きができない！」

スゲエ、そこまで見抜いてるのかよ。

「アラムラデー」

メルト得意の爆発系最大の呪文。

これで決まった！

！！！！！！

…プスン

「…メディー、どうゆうつつもりだ？」

『…わりい』

「なぜ、ここまできて…俺に魔力封じの呪文をかける？…なぜだ！」

『友達がいたんだ。巻き添い喰らっちゃまうだろ』

「クソ野郎！俺が罰を喰らうはずだったのに……なんでだよ、メデイー…」

『やっぱりな。近くにいる人間に気付かないなんてメルトらしくないと思っただよ』

「マデイーさんの事…すまなかった」

『どうせメルトの事だ。自分の父親が俺の父親を殺したと聞いて、俺に申し訳ないと思ってたんだろっ。』

だからワザと自分が掟を破り、手柄を俺一人にしようってか？メルトの判断力も赤点だな』

メルトのその計画も、簡単に崩れさった。

よりによって…

巻き添いを喰らいそうになったのが…



リョータだったから。

なんでリョータが…ここにいるんだよ…。

「分かってるのか？お前は以前関わった人間と接したんだぞ？」

『それは掟破り。つまり、魔界追放を意味する』

でも、もう決めちまつたんだよ。

友達は俺が守るって…。

俺達のせいでリョータが死んだら、舞にまた泣かれちまうからな…。

『じゃあな、メルト』

「この…判断力赤点野郎が…」

突然黒いホールが現れ、俺はそこへ吸い込まれていった。

## リョータ視点で繰り広げられる異世界の物語り

「……ハアアア」

『どうした愛？いきなりため息なんてついて』

「うん…ちょっと昨日の事で…ね」

昨日…花火大会の事か。まあ、そりゃリョータや彼女さんは可哀相だと思うよ。

ずっと一緒にいた親友が、人間ではなく、悪魔だった。なんて言われ、しかも、昔の友人の俺を殺そうとしている。

それにムリヤリ魔界に連れ帰った張本人である愛を怨んでいた事を知った愛の気持ちだって複雑だろう。

『気にするな。愛は間違った事はしていない。あのままだったら、リョータにも危害が加わったかもしれないんだろ？』

「うん…。でもね、メディーは人間として育ったから、悪魔とは思えないほど心が優しくかったの。それが…私達を狙ってるなんて事も、ちよっとショックで…」

それはメディーだって仕事だから仕方ないだろ。

…って、なんで俺は敵の肩を持つてんだろ？

「メディーなら魔界と天界の争いを辞めさせられるって期待してたんだけどなあ…」

俺は人間時代のメディーは知らないから何とも言えないが、普通の悪魔と何かが違うと言う事だけは分かった。

『敵に情けはかけるな？油断したら俺達は殺されるんだぞ？』

「…うん」

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴った。お客さんとは珍しくもない。どうせまた施設のおばちゃんからの差し入れだろう。

『はあゝい。今開けます』

ドアを開けると、そこに居た人物は、意外な事にリョータだった。

『おう、どうした？』

明るく話し掛けてみるが、リョータは難しそうな顔をしている。

「ああゝ…その…なんだ…」

リョータが中々言い出さない時は、照れ臭い時だ。

前回の事をわざわざ謝りにきてくれたのだろうか？

「讓くん！ちょっと来て！」

いきなり愛に呼ばれ、耳を引っ張られた。

「悪魔が近付いてきた。リョータくんには帰ってもらって」

悪魔：そうか。リョータには明の姿は見せられないからな。

『悪いリョータ！ちょっとこれから用があるんでな、また後で！』

…ちょっと冷たすぎたかな？ まあ後で謝れば良いだろう。

—————

今日俺が譲の家を訪ねてきたのは他でもない。

天使にちゃんと謝りたかったし、明の事を聞きたかったからだ。

しかし、こつもアツサリ追い出されるとは…やはり怒っているのだろうか。

それに用事というのも気になる。

二人には悪いと思ったが、後をつけさせてもらった。

二人は慌て気味に走り、ある家に着いた。

中から出てきたのは一人の人間。

話を聞いたソイツは、顔色を変え、譲達についていった。

三人の様子から察するに、この後何かがあると言つ事は分かった。  
俺にも緊張が走る。

気付かれない様に最前の注意をはかりながら、尾行を続けた。

三人は人気のない道を進んでいき、ついには空き地に到着した。

ここは、周りに家もなく、すでに廃地と化している所だ。…こんな所に、なぜ…？

『さあゝて、来たようだな…』

譲が空を見上げて言った。

何か来たのか…？ そう思つて俺も空を見上げるが、何もいない。

なんだよ…そう思つた時、譲達がいきなりバックステップを踏み、素早く身を退いた。

何事だ…と思つた瞬間…譲達が立っていた場所に突然の爆発音と共に、地面がえぐれた。

状況がつかめない。

ただ、俺には見えない何かを奴らは見えている…！

そして俺は一つの答えにたどり着いた。

「明…明が来ているのか!？」

もはやそうとしか考えられない。

譲達の瞳は赤くなっていた。これは花火大会の時に見た目だ。

『破壊能力ー!!』

「思考看破能力!譲君、右だ!！」

確に…奴らは誰かと戦っている。

やはり明…明がいるんだ!

俺はいても立つてもいられなくなり、譲の元へ走った。

『リョータ、危ない!』

…え?

ふと上を見上げると、眩しい程の大きな光が見えた。

「くらえ、人間!」

声は聞こえたが、姿は見えない何かがその光を俺達めがけて放ってきた……。

マジかよ!?

強く閉じた瞼を開けても、何かが起きた形跡はなかった。

上空の方では煙が上がっているが、譲達に変化はない。

「リョータ…くん？」

やっと天使も俺の存在に気付いた。

その時、上空に黒いゲートが現れた。

それは俺の目にも確認できた。

一瞬…ほんの一瞬だが、誰かがそのゲートに吸い込まれて行くのが見えた。

あれはまぎれもなく…

「明…？明あー！！」

明だ。悪魔みてえな格好だったが、あれは一年前に…最後に見た明はあの格好をしていた。遊園地で見た…あの明だ。

「譲！どうなってんだよ！今の奴は明だろ？てめえ、やっぱり殺したんか！？」

譲の胸倉を掴み、怒鳴り散らしたところで、俺は頬に強い衝撃を受けた。

後方に吹っ飛び、前を見てみると、悪魔がいる。

碧い長髪に鋭い目付き。その目からは異様な怒りが伺え、それは俺に向けられたものだった。

「てめえのせいで…」

その悪魔は俺に言った。

俺のせい…？

意味が分からねえ。

何をしたって言うんだよ。

譲、説明してくれよ。

誰だよコイツは。

明はドコ行っただよ。

「てめえが来なけりやなあ！メディーは…」



メディー？

誰なんだって。

アイツはメディーなんて名前じゃねえ。

沖本 明。

そう呼んでたんだぞ？

「メディーは以前関わってた人間と接した。…奴は。奴は！」

悪魔が凄い力で俺の胸倉を持ち上げる。

苦しい。

なのに、頭が混乱してついてこない。

『破壊のうりょー』

「邪魔するな！アラム」

悪魔の手が光ったと思ったら、譲の足元が爆発した。

今のは魔法なのか？

「もう…お前らと戦う理由がなくなった。今まで悪かったな」

『メルト…だったか？ちょっと待てよ。友の死を犠牲にする気か？メディーはアンタに手柄を譲ったんだろ？ならかかってこいよ！』

「……………」

抜け殻のようになった悪魔は握力を弱め、俺は地面に落とされた。

譲と何か言い合っているが、そんな事はどうだって良い。

「そんな事より…やる事ができた」

『やる事…？』

「メディーを助けに行く。どうせ赤い目の剥奪に与えられた期限は今日まで。もうお前らと会う事はない」

『メディーは助かる…のか？』

「まあな。かなり危険だが」

『俺も連れてけ』

「貴様には関係ない」

『関係ある。メディーはリョータを助けてくれたからな』

おいおい、ちよつと待てよ。さつきから聞いてりやメディーってのは明なんだろ？

って事は明は俺を助けるためにゲートに吸い込まれたってのかよ？

「この人間を救ったのは明自身のためだろ。貴様のためじゃない」

『理由はどうあれ、結果はメディーのおかげでリョータは助かった。俺はついてくぞ。』

「人間ってのは損な生き物だな」

『アンタだってメディーのために自分を犠牲にしたくせに』

「フツ、着いてこい。譲！」

『頼んだぜ、メルト！って訳だ。愛、大樹、留守番ヨロシクな』

「止めたって無駄だね」

「いつてらっしゃい。必ず帰ってきてね。」

『わかったから泣くなよ、愛。また愛の作ったオムライス食いたいしな』

「…バカ」

そう言って悪魔は譲を連れて行ってしまった。

今日の前で起きた事は現実か？

こんな非科学的な事が起きて良いのか？

話が進んでいくのに取り残された俺は放心状態になっていた。

## 最終話　チヨメリプ！！

…ん。

どこだココは。

手足が鎖で縛られてる。

身動きできねえ。

『くそ！…くそ！…！』

あがいてみるが、手足を繋いだ鎖は音を立てるだけでビクともしなかった。

「ほう、やっと起きたか」

明かりを照らされ目が眩む。

かろうじて声の主の正体を確認すると、見た事もない悪魔だった。

『アンタ誰？』

「違法者を裁く者さ」

違法者：？

ああそうか。俺はリョータを助けるためにメルトの呪文を封じたんだっけ。

その行為が以前関わった人間との接触に繋がるために俺は捕まったんだった。

「蛙の子は蛙。父親に続いて息子まで違法者か」

『父さんの悪口言うなデメエ。ぶっ飛ばすぞ』

「黙れ！」

身動きをとれないにも関係なしに、そいつの拳が腹に直撃した。

「まったく、まあお前を裁くのはこれが終わった後だ」

さっきからソイツはモニターを見て楽しんでいる。

腹に走る衝撃に耐えながらも、俺もモニターを見る事にした。

「――続いての相手は――！」

何だ？ このスタジオは。

しかも大勢の観客に囲まれながら二人が戦っているのが見えた。

見間違えるはずがない。

あれはメルトだ。

体中ボロボロになりながらも戦っている…！

「…アラーム！」

くプスンく

何やってんだメルト！

もう魔力が残ってねえじゃんかよ！

そんな事にも気付かない程疲れ切っているのか？

「ヒヒヒ、バカな奴」

対戦相手の死神みたいな奴が呪文を唱え始めた。

やべえってメルト！

「喰らえ…デスアトライ」

黒い光の光線がメルトに向かって一直線に伸びる。

「う…うああああ！」

有り得ない程の素早い動きでかわしたメルトは死神の元へ突っ走る。

「らあああああ！」

振り切った拳は死神の頭をもぎ取った。

「ー勝者メルト。これで49戦全勝！残るはあと一試合となりましたあ！」

49戦！？ 何やってんだメルト！！

「メディー、ここは違法者を助けるコロシウムだ」

何すかそれ？

「観客は金を払って殺し合いを楽しんでいるのさ。挑戦者が50戦勝ち抜けば、メディーは助かる」

『マジで！？ウツヒョオ、やったぜ！！』

……なあゝんて言う訳ねえだろうがあ！！

メルトを開放しやがれえ！

俺は力いっぱい鎖を契ろうとした。

しかしそれも虚しく、鎖は切れない。

「無駄だ。その鎖は魔力を封じる。それにメルトは自分からここに



来たんだ。メディーが辞めろなんて言ったら、メルトの努力が無駄になるぞ?」

ちくしょう…体に力が入らねえ…。

「ちなみに…メルトがメディーを殺した…と言われたらしいな」

父さん…の事か。

「メディーもお前と同じ、ここに連れてこられたんだ。同じ様にメルトが助けにきたが…メルトは」

「…最後の相手は…」

モニターに映ったのは、メルトの身長軽く十倍はある、ばかでかい化け物だった。

「メルトはコイツに勝てずに殺された。そして…メディーもな」

そっか…そういう事か…。

ゴメン、メルト。一瞬でもお前を怨んじまった自分が情けねえよ。

「親が越えられないのを時代を越えて今度は息子が…ねえ。本当に貴様らは馬鹿だ! 所詮は蛙の子は…」

くガシャンく

鎖が外れた…。

「誰だ!？」

「――破壊能力!!」

一瞬にして鎖と違法者を裁く者を破壊した。

こんな事ができるのは…

『…譲?』

「大丈夫か?」

なんで…譲が俺を助ける?

俺はお前を殺そうとしたんだぞ?

「リョータの事、助けてくれた礼だ」

『リョータは俺の友達だからな』

「フツ、早くメルトのトコ行くぞ」

俺は部屋を後にし、コロシウム場へ向かった。

それにしても人間がこんな所に入って来れるなんて…な。

どうせメルトが連れて来たんだろう。

譲だって体中傷だらけだ。

『…ありがとう』

「まさか悪魔に礼を言われるなんてな」

笑った譲。やっぱ人間の心って暖かいんだなあ。

――――

コロシムに駆け付けた俺達だったが、すでにメルトは地面に倒れていた。

『メルトおー！寝てんじゃねえよ！マルトさんは…そいつに殺されたんだぞ！…！』

俺はメルトの心に話しかけた。テレパシーってやつだ。

「マジかあ…じゃあコイツに勝たなきゃ…な」

『そうだ、立て』

「でもよお…体が動かないんだ。メディーも助かった事だし…もういいかな」

「そんなのダメ…！慈悲能力！」

光がメルトを包み込む。

体の傷が回復したメルト。

『…リユーファ』

「愛！それに大樹！お前らは待ってるって」

「そんなの出来る訳ないじゃない！」

全く…俺なんかのために…どいつもこいつもお人よしな連中ばかりだぜ。

「――ウィークポイント看破能力！メルト君、そいつの弱点は角だ。そこが魔力の源になってる」

沢田 大樹…人の思考や弱点を読む男。  
その能力の複合として先読みなどの技も編み出すバトルセンスの持ち主。

「――慈悲能力！私の魔力をメルト君へ！！」

エン・リユーファ…傷を癒す天使。  
天使なのに能力を持ち天界を追い出される。その能力だけでなく、心もまた温かい。

「メデュー、大人しくしろ」

騒ぎを聞き付けた追ってが俺の体を押さえ込む。

「――破壊能力！」

木之下 譲…何でも破壊する能力を持つ男。  
それも悪用はせずに人の心を持ち通す男。

「サンキュ、みんな。待ってる。今…コイツを」

メルトからのテレパシーはそこで途切れた。

「アラームラディー！魔力フルパワー！！」

さらに博士から教えてもらった魔力一点集中により、凄まじい光線爆発が化け物の角どころか、体ごと大爆発。

「…しょ…勝者メルト！これで50戦勝ち抜き達成——！！！！」

巻き上がる歓声。腐った観客も、さすがにメルトのこの努力には関心したみたいだ。

そして俺達は無事に地上に帰る事ができた…。

—————

『無茶しやがるなあメルトは』

「まあ何とかなっただじゃん」

…メルトも俺の性格に似てきたな。

「父の仇も討てたし、良かったぜ」

晴れやかな笑顔を見せるメルト。

…あれ？ こいつ、笑うんだっけ？

おっと、それより譲に礼を言っとかなきゃな。

『ありがと…な。その…助けてもらって』

「別に…アンタら良い奴みたいだし…。天使と一緒に暮らしてんだから、悪魔だって仲良くなれっかな〜思ってたさ」

譲…コイツは本当に人間がよく出来ている。

過去の両親の話を聞いた時、どことなく俺と同じ雰囲気を感じた。

両親から愛を受けずに育った人間。

「メデー…その…一つ、聞いてもイイか？」

『なんじゃい？遠慮なく言ってみなさい？俺達はもうブラザーさ』

「メデーは…人間と悪魔の子供なんだよな？辛い事とかあったか？」

『うっん…ねえな！』

俺の回答が意外だったのか、譲は『えっ？』って顔をする。

『つか自覚なかったし。人間として普通に育ったし…それがどうかしたのか?』

「愛と…人間と天使が結ばれると思うか?」

。。。。。

『ほえええ!?!マジかよ譲っち!愛と…えええ!?!』

「うっせえな!好きなんだから仕方ねえだろ!」

照れちゃってるよ、カワイイねえ。

『俺は良いと思うぜ』

「…………え?」

『天使と人間の子供なんて…カッコイイじゃん?』

俺は譲に笑ってみせた。

『もしお前らが捕まった時…今度は俺が助けに行つてやるよ』

「…メディー」

『お前らに子供ができて、事実を知ったら、そりゃ子供だってビツクリするだろうな。…でもな、水が入れ物で形が変わるみたいに、その子がどうなるかは、譲と愛次第じゃねえの?』

「…らしくねえ事言っな」

『うつせえよ変態』

「変態じゃねえ!」

『天使に惚れちゃったヘンタゝイ!』

「じゃあお前の両親も変態じゃねえか!」

『父さんと母さんの悪口言っな! てめえ目え狩るぞ!』

「やってみろやコラあ!」

『んだとコラあ!』

「……………」。

「ったく、メディーの奴……あんな楽しそうに笑いやがって」

「あれ?メルト君ヤキモチ?」



「変な事言つよ大樹。お前こそ、讓があんな楽しそつだぞ?」

「ほんとに…想像つかないよ…あの暗かつた讓君が…あんなに…」

「あ…!メデーの奴、呪文使う気だ…!」

「やばい…!讓君の目が赤く…!」

「止めるぞ大樹!」

「わかつた!」

「男つて馬鹿ね…。でも私の予想は当たつたみたい。人間も悪魔も天使も…仲良くなれたのは明くんのおかげね。」

「さあて…皆仲良くなつちやつたけど…閻魔様と神様はこの後どうするのかな?」

悪魔、天使、人間。

「姿形は似てるものの、性質は全く違う者が集まつた時、波乱は起こる。」

「ただそれを取りきつた時、至福とも言える日々が待っているだろう。」

「その者達によつて…今日も世界は成り立つ。」

最終話　チヨメリプ！！（後書き）

完結しました。ども、作者のタンポポです。

いやー、

今作も前作同様、微妙な終わり方ですね　はい、反省します。

実は今、新作の小説を二つも書いてるので、チヨメリプとっとと終わりたい気持ちでいっぱいでした（笑）このサイトのコメディで『ヤクザの学校』・『死んじゃうんだって』というタイトルを見つけたら、ぜひ読んでやって下さい。　チヨメリプ、お付き合いして下さいありがとうございますー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2105c/>

---

チョメリプ2

2010年10月10日05時07分発行